

伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ

守山市文化財調査報告書

2005.3

守山市教育委員会



第 67 次調査 SX - 1 調査風景（西から）



SX - 1 全景



焼土塊遺構全景（北から）



焼土塊遺構検出状況（西から）

序 文

滋賀県南部地域に位置する守山市は、京阪神地域のベッドタウンとして開発が進められてきた地域です。市制施行後、人口も倍増となり7万人をすでに突破しており、現在も増加の一途を辿っています。さらに、交通の拠点でもあることから工業生産もさかんで、多くの工場が市内で操業しています。近年では、昭和に設置された機械が古くなり、新しい設備投資により最新の生産ラインをもつ工場へと変わっています。また、高度成長期に宅地造成された住宅地でも、建て替えが行われ、再開発されることが多くなっています。

開発あるいは再開発に伴って、新たに遺跡が発見されたり調査されることも多くなっています。市内には147カ所もの遺跡があり、県内でも有数の埋蔵文化財が存在します。特に、服部遺跡や下之郷遺跡、伊勢遺跡、下長遺跡など大型の集落遺跡が密集する地域であります。開発に伴う発掘調査によって、市内の遺跡が全国的にみても貴重な遺跡であることがわかってきました。伊勢遺跡は弥生時代後期の巨大集落で、大型建物が計画的に造営され、日本に「国」が生み出される過程をたどることができる貴重な遺跡であることが判明しています。守山市では遺跡の保存を目的とした確認調査を地権者や地元住民の協力を得て進めています。その過程で、伊勢遺跡の実態が少しずつわかってまいりました。最後になりましたが、ご協力頂いた関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成 17 年 3 月

守山市教育委員会

教育長 山川 芳 志 郎

例 言

1. 本書は、平成 11・12・13 年度に実施した伊勢遺跡の範囲確認調査の調査報告書である。調査は国宝重要文化財等保存整備費補助金を得て実施した。整理業務は平成 16 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金を得て実施した。
2. 本調査は、守山市伊勢町字中東浦 56 番地他の水田地で行った。
3. 整理調査は、守山市教育委員会（教育長 山川芳志郎）が実施した。
4. 発掘調査は平成 12 年 2 月 1 日から平成 14 年 2 月 8 日の期間現地調査を実施した。なお、調査整理業務は平成 16 年 6 月 1 日より平成 17 年 3 月 20 日まで実施した。
5. 発掘調査・整理調査業務にかかる教育委員会事務局は以下の体制で実施した。

平成 11 年度			平成 12 年度			平成 13 年度			平成 16 年度		
教育長	川端	弘	教育長	川端	弘	教育長	川端	弘	教育長	山川芳志郎	
教育部長	中野	隆三	教育部長	中野	隆三	教育部長	山中	憲三	教育部長	津田	重幸
生涯学習課長	堀尾	和子	生涯学習課長	堀尾	和子	教育次長	西田	実	教育次長	森	俊晴
生涯学習課参事	山崎	秀二	生涯学習課参事	山崎	秀二	文化財担当課長	山崎	秀二	文化財保護課長	山崎	秀二
調査担当者	伴野	幸一	調査担当者	伴野	幸一	調査担当者	伴野	幸一	調査担当者	伴野	幸一

7. 発掘調査・整理業務及び本報告書作成については伴野が担当した。
8. 本報告書では標高は東京湾ポイントを使用し、北方位は日本平面国家座標六系の X 座標を指す。
9. 本調査にかかる遺物・図面・写真資料は、市立埋蔵文化財センターに保管している。
10. 現地調査については以下の方々に参加を得た

平成 11・12・13 年度

現地調査 羽橋 貴子 市木 尚利 小川 昭平 芝田 政治 北村美佐子 湯口久美子
碓井 富子 小島 繁一 下村 良二 中井 光子 橋本みさ子 中橋フジ枝

伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ目次

序 文
例 言

目 次
挿 図 目 次
図 版 目 次

第 1 章	調査に至る経過と伊勢遺跡の歴史的環境.....	1
第 1 節	確認調査に至る経緯.....	1
第 2 節	伊勢遺跡の歴史的環境.....	1
第 3 節	伊勢遺跡既往調査一覧表.....	3
第 2 章	伊勢遺跡の調査成果.....	7
第 1 節	第 62 次調査の成果	7
第 2 節	第 67 次調査の成果	10
第 3 節	第 69 次調査の成果	16
第 4 節	第 72 次調査の成果	18
第 5 節	第 73 次調査の成果	20
第 6 節	第 76 次調査の成果	21
第 3 章	出土遺物観察表.....	23
第 4 章	調査成果のまとめ.....	24

挿 図 目 次

挿図 1	野洲川流域の遺跡分布図
挿図 2	第 62 次調査全体図
挿図 3	第 62 次調査出土遺物実測図
挿図 4	第 67 次調査全体図・T－3 石囲炉検出状況
挿図 5	第 67 次調査 S X－1 平面図・断面図
挿図 6	第 67 次調査 T－1 全体図
挿図 7	第 67 次調査出土遺物実測図
挿図 8	第 67 次調査 S H－1 平面図・断面図
挿図 9	第 67 次調査出土遺物実測図
挿図 10	第 67 次調査 T－4 平面図・断面図
挿図 11	第 69 次調査出土遺物実測図
挿図 12	第 69 次調査平面図・断面図
挿図 13	第 72 次調査断面図
挿図 14	第 72 次調査平面図
挿図 15	第 73 次調査平面図・断面図
挿図 16	第 76 次調査全体図
挿図 17	第 76 次調査平面図
挿図 18	伊勢遺跡全体図
挿図 19	伊勢遺跡東半部平面図

図 版 目 次

巻頭図版 1	第 67 次調査 S X－1 調査風景（上） S X－1 全景（下）
巻頭図版 2	焼土塊遺構全景（上）焼土塊遺構検出状況
図版 1	伊勢遺跡 62 次調査地全景他
図版 2	伊勢遺跡 62 次調査（上）焼土塊遺構検出状況（西から）（下）焼土塊遺構検出状況（東から）
図版 3	伊勢遺跡 62 次調査（上）S X－1（北から）（下）S X－1（東から）
図版 4	伊勢遺跡 67 次調査（上）T－1 全景（北西から）（下）S X－1 全景（北西から）
図版 5	伊勢遺跡 67 次調査（上）S X－1 全景（西から）（下）焼土塊遺構検出状況（北西から）
図版 6	伊勢遺跡 67 次調査（上）焼土塊遺構検出状況（南から）（下）焼土塊遺構検出状況（北から）
図版 7	伊勢遺跡 67 次調査（上）T－3 全景（南東から）（下）T－3 全景（北から）
図版 8	伊勢遺跡 67 次調査地全景他
図版 9	伊勢遺跡 67 次調査 T－4 全景他
図版 10	伊勢遺跡 69 次調査（上）調査地全景（北東から）（下）調査地全景（南西から）
図版 11	伊勢遺跡 69 次調査（上）断割り 1（東から）（下）断割り 2（南東から）
図版 12	伊勢遺跡 72 次調査（上）調査地全景（南西から）（下）遺構検出状況（北東から）
図版 13	伊勢遺跡 72 次調査（上）旧河道検出状況（西から）（下）旧河道断面（西から）
図版 14	伊勢遺跡 73 次調査（上）調査地全景（北西から）（下）旧河道断面（北から）
図版 15	伊勢遺跡 76 次調査（上）調査地全景（西から）（下）調査地全景（北から）
図版 16	伊勢遺跡 62 次調査出土遺物写真
図版 17	伊勢遺跡 67 次調査出土遺物写真
図版 18	伊勢遺跡 67 次調査出土遺物写真
図版 19	伊勢遺跡 67 次調査出土遺物（上）69 次調査出土遺物（下）

第1章 調査に至る経過と伊勢遺跡の歴史的環境

第1節 確認調査に至る経緯

伊勢遺跡は昭和56年、個人住宅の建築に先立つ試掘調査（第1次調査）によって発見された弥生時代後期の遺跡である。現在までに94次にわたる調査が行われ、特異な集落遺跡であることが判明している。平成4年に弥生後期としては全国最大級の大型建物が発見され、その後も大型建物が次々と発見された。これまでの調査によって、12棟の大型建物が確認されており、全国的にみても特異な内容をもつ遺跡であることが判明している。これらの大型建物は伊勢遺跡東半部の200m四方の範囲に集中している。伊勢遺跡は紀元2世紀代を中心に発達する遺跡であるが、この時代は全国各地に「国」が形成され、政治的に地域的統合が進む時代と考えられている。伊勢遺跡の大型建物は、そのような「国」の中心的施設であったとみられる。

伊勢遺跡周辺部の下長遺跡や、栗東市の下鉤遺跡でも同時代の大型建物が次々と発見され、「国」を構成する主要な遺跡群であったと考えられている。弥生後期の大型建物が約2.5km四方に集中して造営される現象は全国的にみても例がなく、日本における国家形成のプロセスを明らかにしていく上で貴重な資料であるといえる。

守山市では大型建物が次々と発見される伊勢遺跡の保存を目的として、平成9年度から確認調査を実施してきた。調査によって大型建物や大型竪穴建物が伊勢町の東側から阿村町の南西側にかけて集中することが判明してきた。さらに、その南側と北側には東西方向に伸びる旧河道があり、その間の微高地上に主要な遺構が造営されていることがわかってきた。

調査にあたっては地元伊勢町・阿村町の地権者の承諾を受け、平面検出を基本とし遺跡の広がりや性格の把握に努めた。遺構の時期決定や性格を掴む上で必要と判断される場合、滋賀県教育委員会文化財保護課と協議のうえ、最小限の掘削調査を行った。調査終了後は、重機及び人力によって埋め戻し原状復帰に努めた。

第2節 伊勢遺跡の歴史的環境

伊勢遺跡は琵琶湖東南部の湖南平野を見渡す扇状地上に営まれている。遺跡周辺の千代遺跡、山田町遺跡、下長遺跡、塚之越遺跡、経田遺跡などでは縄文時代中期末から後・晩期にかけて竪穴住居や土壇等が検出されており、石器や土器が出土している。伊勢遺跡周辺部の扇状地上では、縄文時代にすでに人が住み狩猟や漁労などの活動を行っていたことがわかる。

伊勢遺跡の南側を流れる旧河道では、縄文晩期の土器とともに弥生前期の土器が出土しており、河川沿いの低湿地近くに人が生活していたことが窺われる。栗東市霊仙寺遺跡や守山市中島遺跡などでは弥生前期の土器や石器が多数出土しており、内陸部の低湿地を利用して稲作等の農耕が行われていたことが予想される。

弥生中期になると扇状地末端に下之郷遺跡や二ノ畦・横枕遺跡など巨大な環濠集落が営まれるようになる。伊勢遺跡から北方500mの地点にあたる山田町遺跡でも環濠集落が営まれており、より高燥地に居住空間が広がっていることが窺われる。伊勢遺跡でも中期後半の土器が少量ながら出土しており、弥生中期に集落が営まれていたと考えられる。

弥生後期初頭にはこれらの環濠集落が解体し、集落の様子が判然としない。しかし、伊勢遺跡の北西部で竪穴住居等が見つかっており、小規模な集落が営まれていたことがわかる。伊勢遺跡の西側に隣接する総遺跡では方形周溝墓群が検出されており、集落が一定期間営まれていたことが推測される。

伊勢遺跡は後期中葉に発達しはじめるが、市内の服部遺跡や小島遺跡でも環濠集落が営まれ集住化する傾向が見られる。しかし、後期末には衰退しており、短期間に廃絶する傾向がみられる。伊勢遺跡の発達と同時に、栗東市下鉤遺跡が再び盛行するようになるほか、下長遺跡でも竪穴住居や掘立柱建物が営まれるようになる。伊勢遺跡は南北450m、東西700mを測る広大な空間に竪穴住居や掘立柱建物が集中して営まれており、弥生後期の集落遺跡としては全国最大級の規模を有している。近畿地方の後期集落が大規模に発達しない中で、伊勢遺跡が巨大化するのとは特異である。弥生後期において東西日本の接点であり、物流や交易上の結節点として重要な役割を近江南部地域が担っていたことが推測される。



挿図1 野洲川流域の遺跡分布図

弥生後期末以降、伊勢遺跡は急速に衰退するが、古墳時代に入ると下長遺跡は更に発達を遂げている。幅 20 ～ 30 m 程の河川沿いに細長く居住域が伸び、多数の掘立柱建物が営まれている。遺跡内から出土した準構造船や山陰・瀬戸内・北陸・東海各地の搬入土器から、物流拠点として機能していたことが推測されている。古墳時代前期においても伊勢遺跡では数は少ないものの大型竪穴住居等が営まれており、人が居住していたことがわかる。大洲地区では包含層を切り込む小さな穴から、60 点余りの勾玉や管玉とともに破碎鏡（小型仿製鏡）が出土している。古墳時代前期末に完全に衰退し、埋没したことがわかる。

その後、平安時代まで明確な居住の痕跡は見られない。平安時代後期以降、区画溝などを伴う屋敷跡が鎌倉時代～室町時代にかけて継続的に営まれており、有力な土豪層が居たことが推測される。

以上の通り、伊勢遺跡は縄文時代から中世にわたる大規模な複合遺跡であり、弥生時代後期及び中世に盛期をもつ遺跡であることがわかる。

第 3 節 伊勢遺跡既往調査一覧表

伊勢遺跡は昭和 56 年に発見されて以来、平成 16 年 3 月末までに 93 次に及ぶ発掘調査を行っている。本報告では平成 12・13 年度に行った 62・67・69・72・73・76 次の確認調査の成果について収録している。67 次調査は平成 12 年度に実施した 62 次調査地点の再調査分にあたる。72・73・76 次調査は民間の共同住宅及び個人住宅建築に先立つ確認調査である。現地調査は遺構検出を基本とし、調査終了後は遺構が破壊されないように保護層を設け、埋め戻しをおこなった。

調査回数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
1 次	伊勢町字中東浦 75	昭和 56 年 1 月 16 日～ 昭和 56 年 1 月 22 日迄	個人住宅	約 50 m ²	乙貞 1 号	試掘により弥生後期の遺跡の存在を確認。柱穴・溝（方形周溝墓か）
2 次	伊勢町字中東浦 76・77・82－1	昭和 56 年 4 月 13 日～ 昭和 56 年 7 月 10 日迄	宅地造成	約 3000 m ²	滋賀文化財だより 67 号 乙貞 4・5 号	弥生後期の竪穴住居 9 棟検出。内 1 棟は五角形住居。堀の検出。鎌倉時代の掘立柱建物・井戸等検出。
3 次	伊勢町字大苗代 309－9・311－1	昭和 56 年 7 月 10 日～ 昭和 56 年 9 月 30 日迄	宅地造成	約 3000 m ²	乙貞 5 号	弥生後期の竪穴住居 10 棟検出。内 1 棟は五角形住居。古墳時代初頭から前期にかけての方形周溝墓 8 基を検出。
4 次	伊勢町字大將軍 2 丁田 344・343	昭和 57 年 4 月 12 日～ 昭和 57 年 4 月 26 日迄	農業倉庫	約 400 m ² ／ 580	守文報第 12 冊 乙貞 6.7	弥生後期の五角形住居 1 棟。平安後期の溝・土壇・柱列・井戸等を検出。五角形住居から弥生後期の土器群が出土。
5 次	伊勢町字西浦 537	昭和 57 年 5 月	個人住宅	約 100 m ²	守文報第 12 冊	弥生後期の溝。
6 次	伊勢町 451－1 他二町町 30－1	昭和 58 年 9 月 2 日～ 昭和 58 年 9 月 30 日迄	宅地造成	約 2000 m ²	守文報第 15 冊	奈良時代の掘立柱建物 1 棟・溝を検出。
7 次	伊勢町 451－8 他二町町 30－1	昭和 59 年 5 月 30 日～ 昭和 59 年 6 月 17 日迄	宅地造成	約 1000 m ²	守文報第 15 冊	奈良時代の掘立柱建物 1 棟・溝を検出。
8 次	伊勢町字西浦 537・538	昭和 59 年 11 月 9 日～ 昭和 59 年 11 月 30 日迄	個人住宅	70 m ² ／ 174	守文報第 20 冊	溝
9 次	阿村町字下番田 151－3	昭和 59 年 4 月 5 日 試掘	資材置き場	約 300 m ² ／ 476		旧河道
10 次	伊勢町字二丁田 327－3	昭和 59 年 11 月 10 日～ 昭和 59 年 12 月 1 日迄	個人住宅	約 700 m ² ／ 1269	守文報第 20 冊	弥生後期の竪穴住居 1 棟検出。奈良・平安時代の掘立柱建物・溝、鎌倉時代の建物・井戸
11 次	伊勢町字西浦 540	昭和 59 年 12 月 10 日～ 昭和 59 年 12 月 14 日迄	個人住宅	200 m ²	守文報第 26 冊	溝（しがらみ遺構）
12 次	伊勢町字伊勢里 177－1	昭和 63 年 12 月 19 日～ 昭和 63 年 12 月 26 日迄	農業倉庫	405 m ²	守文報第 33 冊	溝 4 条、土壇 6 基、柱穴、中世とみられる。
13 次	伊勢町字大苗代 303－12	平成元年 1 月 13 日～ 平成元年 2 月 8 日迄	個人住宅	300 m ²	守文報第 33 冊 乙貞 43 号	古墳時代初頭の方形周溝墓 2 基、溝・柱穴 奈良時代（8 世紀前半）
14 次	伊勢町字上阿ノ図 19－1 外 4 筆	平成 2 年 4 月 20 日～ 平成 2 年 6 月 4 日迄	宅地造成	2000 m ² ／ 12464	乙貞 51 号	古墳時代・鎌倉時代の溝、奈良時代の溝 2 条。江戸時代の井戸。
15 次	伊勢町字伊勢里 322－3	平成 2 年 12 月 13 日～ 平成 2 年 12 月 14 日迄	個人住宅	60 m ² ／ 149	守文報第 43 冊	弥生後期から古墳後期の遺物包含層。鎌倉時代の柱穴
16 次	伊勢町字二丁田 347－1	平成 2 年 2 月 4 日～ 平成 2 年 2 月 23 日迄	個人住宅	978 m ²	守文報第 43 冊	鎌倉時代の掘立柱建物・溝・土壇
17 次	伊勢町二丁田	平成 2 年 2 月 平成 2 年 4 月	宅地造成	450 m ²	乙貞 55 号	鎌倉時代の溝・掘立柱建物 6 棟、土壇 7 基 江戸時代の井戸

調査回数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
18 次	伊勢町字中東浦 81 - 1	平成 2 年 6 月 28 日～ 平成 2 年 8 月 8 日迄	倉庫建設	888 m ²	守文報第 42 冊 乙貞 51 号	弥生後期の竪穴住居 9 棟・溝・ 独立棟持柱付建物。 鎌倉時代の掘立柱建物・旧河道
19 次	伊勢町字井上 125	平成 4 年 1 月 28 日～ 平成 4 年 1 月 30 日迄	個人住宅	330 m ²	守文報第 44 冊 乙貞 61 号	弥生後期末の竪穴住居・方形周溝 墓・溝。縄文晩期の深鉢・石鏃
20 次	伊勢町字大將軍 513 - 1・513 - 2	平成 4 年 6 月 8 日～ 平成 4 年 6 月 10 日迄	倉庫建設	約 100 m ² / 948	乙貞 63 号	弥生後期の竪穴住居 1 棟（五角 形住居か）旧河道
21 次	伊勢町字中東浦 80	平成 4 年 6 月 25 日～ 平成 4 年 9 月 25 日迄	倉庫建設	870 m ²	現説資料 92.9.19 乙貞 64・65 伊勢遺跡確認 調査報告書 I 2003/3	弥生後期の大型建物 3 棟（S B - 1・2・3）竪穴住居 7 棟・ 柱穴多数。鎌倉時代の掘立柱建 物 4 棟
22 次	伊勢町字高関 459	平成 4 年 7 月 29 日～ 平成 4 年 9 月 5 日迄	共同住宅	600 m ²	守文報第 48 冊 乙貞 64 号	弥生後期の方形周溝墓 3 基。 古墳時代後期から平安時代の溝。
23 次	伊勢町字西浦 553	平成 4 年 9 月 1 日～ 平成 4 年 9 月 15 日迄	個人住宅	227 m ²	守文報第 47 冊	弥生後期の自然流路（土器出土）。
24 次	伊勢町字溝崎 411 - 1 412 - 1	平成 5 年 4 月 23 日～ 平成 5 年 6 月 30 日迄	共同住宅	2279 m ²	乙貞 69 号	鎌倉時代の掘立柱建物・溝。
25 次	伊勢町字大苗代 308 - 2	平成 5 年 5 月 15 日～ 平成 5 年 5 月 29 日迄	個人住宅	240 m ² / 500	守文報第 53 冊 乙貞 69 号	弥生後期の大溝。 古墳時代前期の方形周溝墓 1 基。
26 次	伊勢町字溝崎 409	平成 5 年 6 月 7 日～ 平成 5 年 6 月 12 日迄	共同住宅	1292 m ² / 1308	乙貞 69 号	耕作跡
27 次	伊勢町字伊勢里 323 - 3	平成 5 年 9 月 21 日～ 平成 5 年 10 月 15 日迄	共同住宅	500 m ² / 998	乙貞 71 号	弥生後期の竪穴住居 2 棟・土壇 6 基。
28 次	伊勢町字南東浦 84 - 1 他	平成 5 年 10 月 26 日～ 平成 7 年 5 月 31 日迄	区画整理	10,000 m ²	乙貞 72.73.74.75 号 守文報第 63.77.80 冊	弥生後期の大型建物・区画溝・ 方形周溝墓。鎌倉時代の掘立柱 建物・区画溝他
29 次	伊勢町字西浦 531 他	平成 5 年 10 月 ～ 平成 6 年 1 月 迄	公共下水	606 m ²	乙貞 73 号表	
30 次	伊勢町字高崎 460	平成 6 年 5 月 23 日～ 平成 6 年 5 月 27 日迄	共同住宅	400 m ²	乙貞 79 表	弥生中期の方形周溝墓。
31 次	伊勢町字伊勢里 322	平成 7 年 1 月 24 日～ 平成 7 年 2 月 17 日迄	公共下水	200 m ²	乙貞 85 号表	弥生後期から鎌倉。
32 次	伊勢町字伊勢里 257	平成 7 年 9 月 15 日	個人住宅	396 m ²	守文報第 61 冊	井戸（近世）
33 次	伊勢町字大苗代 302 304 - 7	平成 7 年 12 月 20 日～ 平成 8 年 1 月 31 日迄	共同住宅	500 m ² / 1312.9	乙貞 84 号	縄文時代の土壇・柱穴。
34 次	伊勢町字伊勢里 525	平成 8 年 3 月 4 日～ 平成 8 年 3 月 22 日迄	個人住宅	346 m ²	乙貞 85 号 守文報第 61 冊	鎌倉時代の掘立柱建物・溝・土 壇
35 次	二町町字北上代 7 - 5、9 - 2	平成 8 年 7 月 22 日～ 平成 8 年 8 月 26 日迄	宅地造成	336 m ² / 2094	乙貞 88 号	弥生後期の方形周溝墓・竪穴住 居。
36 次	伊勢町字大將軍 516 - 1	平成 8 年 11 月 13 日～ 平成 8 年 11 月 26 日迄	個人住宅	120 m ² / 218 m ²	乙貞 90 号 守文報第 61 冊 97 年 3	弥生後期の周壁溝が巡る五角形 住居。中世の溝。
37 次	伊勢町字西浦 520 521	平成 8 年 11 月 13 日～ 平成 8 年 11 月 21 日迄	共同住宅	117 m ² / 368 m ²	乙貞 90 号	溝 3 条・土壇 2 基・柱穴。
38 次	伊勢町字南代 104	平成 8 年 11 月 20 日～ 平成 8 年 12 月 7 日迄	共同住宅	117 m ² / 316 m ²	乙貞 90 号	溝 5 条・土壇 1 基。
39 次	伊勢町字伊勢里	平成 9 年 1 月 31 日～ 平成 9 年 2 月 14 日迄	個人住宅	80 m ² / 368	乙貞 91 号 守文報第 66 冊 98 年 3	溝 3 条・土壇 2 基・柱穴。
40 次	伊勢町字南代 3 街区 9	平成 9 年 4 月 24 日～ 平成 9 年 6 月 13 日迄	共同住宅	323 m ² / 1148	乙貞 93 号	旧河道。
41 次	伊勢町字西浦 548 - 2	平成 9 年 5 月 16 日	個人住宅	25 m ²	守文報第 66 冊 98 年 3	中世の土壇。
42 次	伊勢町字西浦 548 - 1	平成 9 年 6 月 26 日	個人住宅	25 m ²	守文報第 66 冊 98 年 3	古墳時代前期の溝。中世の土壇。
43 次	伊勢町字南代 14 街区 4	平成 9 年 8 月 4 日～ 平成 9 年 8 月 26 日迄	個人住宅	374 m ² / 745	乙貞 94 号 守文報第 66 冊 98 年 3	掘立柱建物 4 棟、中世の井戸 1 基。
44 次	伊勢町字南代 14 街区 7	平成 9 年 10 月 8 日～ 平成 9 年 11 月 6 日迄	共同住宅	220 m ² / 768	乙貞 95 号	弥生竪穴住居 1 棟・独立棟持柱 付大型建物（S B - 4）・土壇 2 基・柱穴多数。中世の溝。
45 次	伊勢町字伊勢里 10 街区 4	平成 9 年 11 月 22 日～ 平成 9 年 12 月 24 日迄	個人住宅	433 m ² / 500	乙貞 96 号 守文報第 66 冊 98 年 3	弥生溝 1 条。中世区画溝・掘立柱建 物 1 棟、井戸 1 基 柱穴多数
46 次	伊勢町字中東浦 80	平成 10 年 1 月 22 日～ 平成 10 年 3 月 4 日迄	確認調査	100 m ²	乙貞 97 号 伊勢遺跡確認調査報 告書 I 2003/3	弥生後期の竪穴住居 7 棟・柱穴 多数・土壇。

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
47 次	伊勢町字碑田 396	平成 10 年 3 月 13 日～ 平成 10 年 3 月 14 日迄	宅地造成	60 m ² / 2200	乙貞 97 号	溝 1 条、古墳時代後期柱穴 1 個。
48 次	伊勢町字南東浦 9 1	平成 10 年 5 月 21 日～ 平成 10 年 6 月 19 日迄	確認調査	150 m ²	乙貞 99 号 現説資料 98.6.14 伊勢遺跡確認 調査 I 2003.3	独立棟持柱付大型建物 1 棟 (S B-5) 柱根 2 出土・柱穴多数。 中世の溝 1 条。
49 次	阿村町字上番田 143-1	平成 10 年 9 月 16 日～ 平成 10 年 10 月 23 日	工場建設	1856 m ²	伊勢遺跡確認調査報 告書 I 2003.3	竪穴住居・溝。
50 次	伊勢町字南東浦 92・93	平成 10 年 10 月 12 日～ 平成 10 年 11 月 12 日迄	共同住宅	800 m ² / 1246	伊勢遺跡確認調査報 告書 I 2003.3	溝・土壇・柱穴。 中世の掘立 柱建物群。
51 次	伊勢町字中東浦 79-1	平成 10 年 11 月 2 日～ 平成 10 年 11 月 20 日	確認調査	500 m ²	伊勢遺跡確認調査報 告書 I 2003.3	弥生後期の旧河道。
52 次	阿村町 158	平成 10 年 11 月 20 日～ 平成 10 年 12 月 25 日迄	確認調査	500 m ²	乙貞 102 号 現説資料 98.12 伊勢遺跡確認調 査報告書 I 2003.3	竪穴住居 5 棟・大型建物 (S B -10)・溝・柱穴。
53 次	阿村町 157-1	平成 10 年 12 月 4 日～ 平成 10 年 12 月 18 日迄	確認調査	500 m ²	乙貞 102 号	竪穴住居 2 棟・柱穴・溝。
54 次	伊勢町字南代 589	平成 11 年 2 月 8 日～ 平成 11 年 2 月 18 日迄	共同住宅	500 m ²	乙貞 103 号 伊勢遺 跡確認調査報告書 I 2003.3	竪穴住居 1 棟・溝・柱穴。
55 次	伊勢町字南代 254	平成 11 年 5 月 13 日～ 平成 11 年 5 月 17 日迄	共同住宅	200 m ²	乙貞 109 号表	旧河道。
56 次	伊勢町字中東浦 78	平成 11 年 5 月 10 日～ 平成 11 年 7 月 8 日迄	確認調査	800 m ²	乙貞 105 号 現説資料 99.7.3 伊勢遺跡確認調 査報告書 II 2004.3	S B-1 と S B-11 の柱穴の切 り合いを確認。 竪穴住居 3 棟・ 溝・柱穴多数。
57 次	阿村町字上番田 143-1	平成 11 年 5 月 10 日～ 平成 11 年 8 月 25 日迄	工場建設	2000 m ² / 3288,99	乙貞 106 号 伊勢遺 跡第 57 次発掘調査 報告書 2001.3	弥生後期竪穴住居 1 棟。古墳時 代前期竪穴住居 1 棟・溝 5 条・ 旧河道。
58 次	阿村町 155 158-1	平成 11 年 8 月 27 日～ 平成 11 年 9 月 14 日迄	確認調査	400 m ²	乙貞 106 号伊勢遺跡確認 調査報告書 II 2004.3	大型建物 (S B-10)・竪穴住居 の再調査。
59 次	阿村町 163	平成 11 年 9 月 16 日～ 平成 11 年 9 月 30 日迄	確認調査	200 m ²	伊勢遺跡確認調査報 告書 II 2004.3	溝・竪穴住居 1 棟。
60 次	阿村町 155 158-1	平成 11 年 9 月 27 日～ 平成 11 年 12 月 14 日	確認調査	700 m ²	乙貞 107 号 伊勢遺跡確 認調査報告書 II 2004.3	竪穴住居 11 棟・溝 3 条・土壇・ 柱穴。
61 次	阿村町 158-1	平成 12 年 1 月 4 日～ 平成 12 年 1 月 18 日迄	里道改良 工事	100 m ²	伊勢遺跡確認調査報 告書 II 2004.3	竪穴住居 3 棟・溝・柱穴。
62 次	伊勢町 56	平成 12 年 2 月 1 日～ 平成 12 年 3 月 21 日迄	確認調査	400 m ²	今回報告分 乙貞 109 号	竪穴住居 1 棟・焼土魂遺構・旧 河道。
63 次	伊勢町 62	平成 12 年 2 月 21 日～ 平成 12 年 3 月 21 日迄	確認調査	500 m ²	伊勢遺跡確認調査報 告書 II 2004.3	竪穴住居・柱穴・土壇。
64 次	伊勢町 56 59-1	平成 12 年 6 月 26 日～ 平成 12 年 7 月 6 日迄	確認調査	400 m ²	乙貞 113 号 伊勢遺跡確 認調査報告書 II 2004.3	旧河道・土壇。
65 次	伊勢町字南代 646 647	平成 12 年 8 月 22 日～ 平成 12 年 8 月 30 日迄	共同住宅	250 m ²	守埋文平成 12 年度 年報	旧河道・攪乱土壇。
66 次	阿村町 142-1	平成 12 年 9 月 11 日～ 平成 12 年 9 月 29 日迄	確認調査	400 m ²	伊勢遺跡確認調査報 告書 II 2004.3 乙貞 113 号	大溝 1 条・溝 3 条・土壇・柱穴。
67 次	伊勢町 171-1	平成 12 年 10 月 30 日～ 平成 12 年 12 月 9 日	確認調査	400 m ²	今回報告分 乙貞 114 号	竪穴住居 1 棟・焼土魂再調査。
68 次	伊勢町 284	平成 12 年 11 月 21 日～ 平成 12 年 12 月 4 日	確認調査	500 m ²	乙貞 114 号 伊勢遺跡確 認調査報告書 II 2004.3	旧河道・大溝。
69 次	伊勢町 76	平成 13 年 1 月 15 日～ 平成 13 年 1 月 31 日迄	確認調査	200 m ²	今回報告分	遺物包含層・溝。
70 次	伊勢町字南代 607	平成 13 年 2 月 2 日～ 平成 13 年 2 月 15 日迄	個人住宅	150 m ²	守文報平成 13 年度 国庫補助	旧河道。
71 次	伊勢町字森ヶ下 426.427	平成 13 年 5 月 23 日～ 平成 13 年 7 月 19 日迄	宅地造成	500 m ² / 2701.95	乙貞 117 号 現説資 料 01.7. 14	古墳時代前期～奈良の掘立柱建 物 7 棟・溝。
72 次	伊勢町 259	平成 13 年 7 月 2 日～ 平成 13 年 7 月 6 日迄	共同住宅	250 m ²	今回報告分	旧河道・溝。
73 次	伊勢町 613 614	平成 13 年 8 月 20 日～ 平成 13 年 8 月 29 日迄	共同住宅	250 m ²	今回報告分	旧河道・柱穴。
74 次	阿村町 166-1 167	平成 13 年 9 月 5 日～ 平成 13 年 12 月 21 日迄	確認調査	800 m ²	乙貞 120 号 現説資 料 01.12.17	大型竪穴住居 1 棟・棟持柱付大 型建物 2 棟 (S B-9・12) 竪穴住居 2 棟・柱穴・土壇多数。

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
75 次	伊勢町字伊勢里 315 - 1 316 - 1	平成 14 年 1 月 7 日～ 平成 14 年 3 月 29 日迄	宅地造成	700 ㎡／ 2118	乙貞 121 号 現説資料 02.3.30 伊勢遺跡 75 次調査報告書 03.3	五角形住居を含む竪穴住居 17 棟・溝・柱穴。
76 次	伊勢町字南東浦 602 - 1	平成 14 年 2 月 7 日～ 平成 14 年 2 月 8 日迄	個人住宅	376 ㎡	今回報告分	掘立柱建物・中世の柱穴。
77 次	伊勢町字南代 633	平成 14 年 6 月 18 日～ 平成 14 年 6 月 24 日迄	事務所 建築	723 ㎡		旧河道・溝・攪乱。
78 次	阿村町 184・185	平成 14 年 7 月 24 日～ 平成 14 年 7 月 31 日迄	共同住宅	150/446 ㎡	乙貞 124 号	弥生後期の竪穴住居。
79 次	伊勢町字南代 606	平成 14 年 7 月 29 日～ 平成 14 年 8 月 3 日	共同住宅	150 ㎡		旧河道。
80 次	阿村町 168・170	平成 14 年 9 月 18 日～ 平成 14 年 11 月 15 日迄	確認調査	500 ㎡	乙貞 127 号	弥生後期の竪穴住居・区画溝・ 柱穴等。
81 次	阿村町 166-1	平成 14 年 10 月 1 日～ 平成 15 年 3 月 15 日迄	確認調査	400 ㎡	乙貞 127 号 現説資 料 03.3	弥生後期の大型竪穴建物、独立 棟持柱付き建物。
82 次	伊勢町字大將軍 516-2	平成 14 年 11 月 11 日～ 平成 14 年 11 月 14 日迄	個人住宅	410 ㎡		弥生後期の竪穴住居、近世の溝・ 柱穴等。
83 次	伊勢町字森ヶ下	平成 14 年 11 月 18 日～ 平成 14 年 12 月 6 日迄	宅地造成	200 / 1336 ㎡	乙貞 126 号	古墳時代の溝、柱穴等。
84 次	伊勢町字井上 677	平成 15 年 2 月 12 日～ 平成 15 年 3 月 7 日迄	共同住宅	390 ㎡	乙貞 127 号	弥生後期の溝。
85 次	伊勢町字南代 648・649	平成 15 年 2 月 28 日	分譲住宅	885 ㎡		攪乱。
86 次	伊勢町字南代 615・616	平成 15 年 3 月 12 日～ 平成 15 年 3 月 14 日迄	共同住宅	666 ㎡		旧河道・溝・攪乱。
87 次	伊勢町字南代 624・625	平成 15 年 3 月 18 日～ 平成 15 年 3 月 19 日迄	共同住宅	835 ㎡		旧河道
88 次	伊勢町字南代 624・625	平成 15 年 8 月 4 日～ 平成 15 年 8 月 20 日迄	共同住宅	200 / 836.78 ㎡		87 次調査分の再調査。旧河道・ 溝等を検出。
89 次	伊勢町字南代 642・643	平成 15 年 8 月 25 日～ 平成 15 年 8 月 28 日迄	分譲住宅	200 / 1066.61 ㎡		攪乱坑が全体に広がる。
90 次	伊勢町字南代 663-2	平成 15 年 10 月 9 日～ 平成 15 年 10 月 15 日	個人住宅	90 / 231 ㎡		旧河道・攪乱坑
91 次	伊勢町字中東浦 62	平成 15 年 11 月 23 日～ 平成 16 年 2 月 21 日	確認調査	400 ㎡	乙貞 132・133 現 説資料 04.2	竪穴住居・柱坑・土壇・中世の 掘立柱建物。
92 次	伊勢町字二町田 324・ 325	平成 15 年 11 月 23 日～ 平成 16 年 2 月 21 日迄	共同住宅	300 / 835.78 ㎡		中世の溝・及び柱穴を検出。
93 次	伊勢町字伊勢里 320-3	平成 16 年 2 月 26 日～ 平成 16 年 3 月 1 日	個人住宅	101.27 / 465 ㎡	乙貞 134 号	方形周溝墓と見られる溝。

第2章 伊勢遺跡の調査成果

第1節 第62次調査の成果

1 調査の経緯と経過

伊勢遺跡 64・68 次調査（伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ所収）で遺跡の北東側を東西方向に流れる旧河道が存在することが判明した。この川が遺跡の北側を画するものと考えられることから、伊勢町 56 番地の水田地で確認調査を企画した。土地所有者である古高町在住の新野輝子氏の同意を得て、平成 12 年 2 月 1 日～同 3 月 21 日の期間、確認調査を実施した。確認調査では既往調査で確認されていた旧河道が検出されたほか、竪穴住居・焼土塊遺構などが検出された。

2 検出した遺構と出土遺物

耕作土・床土直下の黄色シルト上面において遺構検出をおこなった。遺構検出面は標高 98.3 m を測る。遺構検出の結果、トレンチ北東側に東西方向に伸びる旧河道等が検出された。

旧河道 1 東西方向に伸びる川跡とみられ、西側にいくに従って南へと湾曲している。64 次調査によって検出された旧河道に接続する遺構と考えられる。今回の地点では幅 5 m 以上あることが確認されたが、64 次地点では幅 13 m あることがわかっている。埋土は礫を含む明灰茶色砂土（7.5YR5/1）の堆積がみられ、その南岸に沿って幅 1～1.5 m の範囲に灰黒褐色粘質土（7.5YR3/1）が帯状に堆積していることが確認された。黒褐色系の粘質土が旧河道の下層にレンズ状に堆積していることが予想され、ゆっくりと埋没していった様子が伺われる。砂層上面には須恵器片が混じり、64 次調査成果と合わせると古代から中世にかけて完全に埋没していったと推測される。

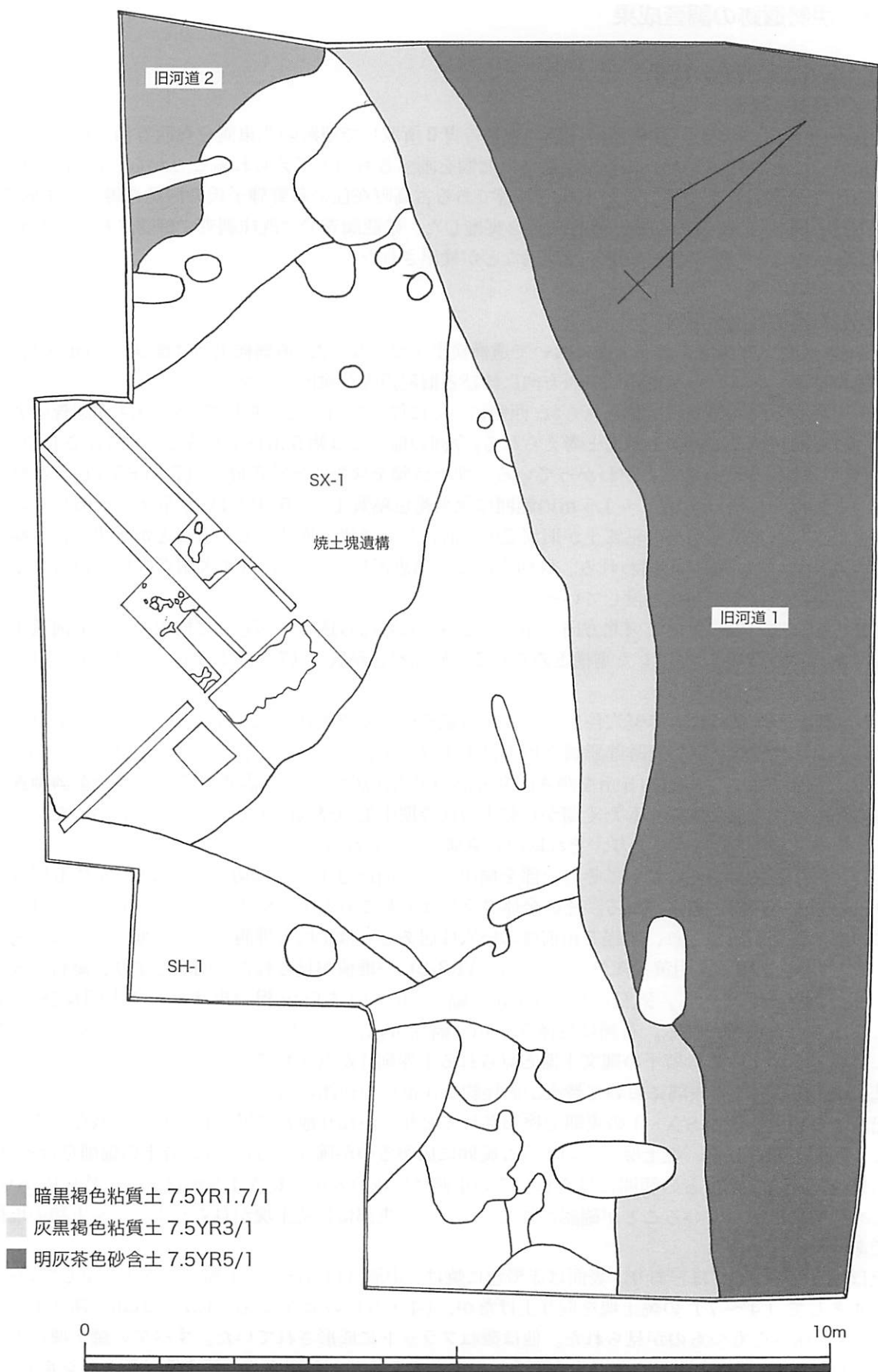
旧河道 2 調査区西隅において南北方向に伸びるとみられる落ち込みを部分的に検出した。旧河道 1 に切られており、それ以前に埋没した遺構とみられる。暗黒褐色粘質土（7.5YR1.7/1）の堆積がみられた。幅 4 m 以上あると考えられる。

SH-1 調査区南隅において竪穴住居とみられる遺構の一部を検出した。平成 12 年 1 月、里道改良工事に伴い 61 次調査（伊勢遺跡確認調査報告書Ⅰ所収）を行っているが、その際に検出された SH-4 の一部と考えてよい。一辺約 5 m を測る隅丸方形の竪穴住居で、67 次調査でその一部を掘削調査している。その際、床面から出土した土器から弥生時代後期中葉の竪穴住居であることが判明した。SX-1 はこの竪穴住居に切られており、それ以前の遺構と考えられる。

SX-1 調査区南側中央においてその一部を検出した。旧河道 1・2 に切られ、SH-1 にも切られており、最も古い遺構と考えられる。その全体プランは不明であるが、SH-1 から旧河道 1 にかけて、弧状にのびる輪郭が観察され、半径 5 m 前後の竪穴住居あるいは土坑と推測される。地山である黄色シルトに似た色調・土質で、明黄茶褐色シルト（7.5YR3/2）の堆積が見られた。同埋土より、砥石（8）、石錘（9）が出土している。砥石は長さ 16cm、幅 10cm、厚さ 5cm 程の板状の石で上面及び裏面、側面に使用された痕跡が残る。石錘は長径 5.5cm、幅 3.3cm、厚さ 1.2cm を測り、上下端を打ち欠き成形している。埋土中には若干の縄文土器と見られる土器細片が含まれていた。

焼土塊遺構 SX-1 の東隅において焼土が直径約 2.5 m 程の範囲に広がっていることを確認した。遺構検出時より、焼土塊が SX-1 の東隅で検出されており、かなり地表に近いレベル高で残存する遺構であることが確認された。焼土塊がどのような範囲に広がるのか確認するために、若干の掘削を行った。その結果、直径 2.5 m ほどの範囲に見られ、その東側には幅 0.8 m、長さ 1.5 m ほどの帯状に広がり、西側にも同様に広がっていることが確認された。ただ、中央部には焼土塊が見られず、シルト層の堆積のみであった。

焼土は厚さ 3～5 cm ほどあり、表面は赤橙色に焼け、中層は白っぽく、下層は灰黒色を呈している。サンプルとして（4～7）の焼土塊を取り上げたが、（4・5）のように直径 1.5～2 cm、深さ 1～2 cm の小さな窪みをもつものが見られた。他は概ねフラットに成形されていた。すべての焼土塊が上面が赤く焼けており、遺構上面から強い火力をうけたものであることが窺える。焼土塊は精良なシルトで、植物等の繊維が混和されたものではない。また、焼土塊上面の埋土及びその周辺の堆積土には焼土や炭・灰などが全く見られず、煮炊き用の炉や生産遺構などにみられる炉とは異なる遺構と推測された。また



挿図 2 第 62 次調査全体図

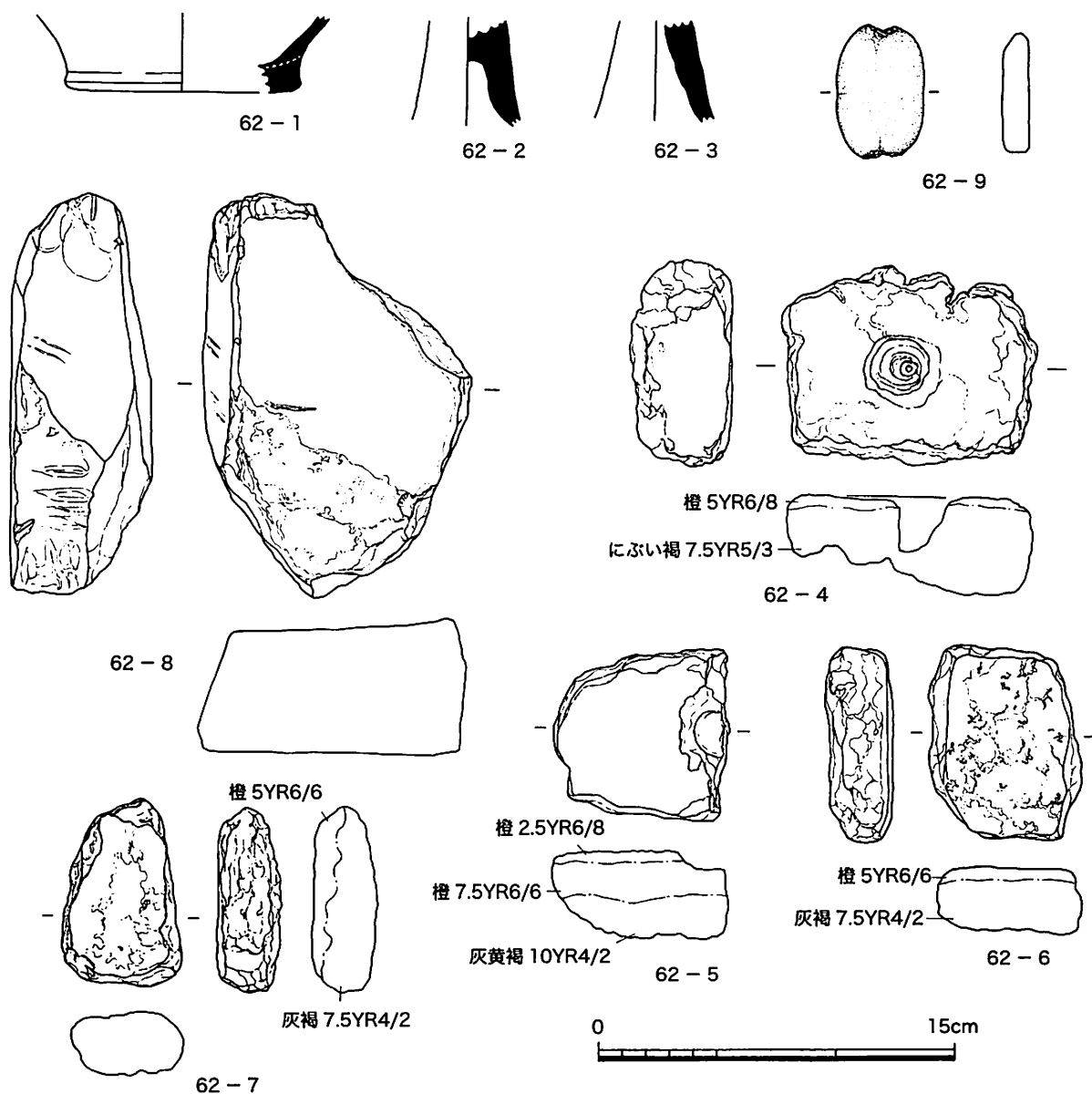
焼土塊表面や埋土について蛍光X線分析を行ったが金属反応はなく、工房等の施設とも異なることが推測された。

焼土塊上層の埋土からは（1～3）の弥生土器が出土した。（1）は突出する平底の壺底部とみられる。底径は約10cmと推定される。（2・3）は高坏脚柱部である。いずれも弥生後期の遺物と見られる。これらの遺物の出土状況からすると、焼土塊遺構は弥生後期の伊勢遺跡の最盛期に営まれた遺構である蓋然性が高いといえる。しかし、伊勢遺跡及び周辺の弥生遺跡の中では類例がなく、その性格や意義についてはまったく不明であり、今後の課題となった。

3 調査成果のまとめ

今回の調査では予想された旧河道が確認されたほか、南北方向に伸びるとみられる旧河道2が新たに検出された。さらにSH-1のプラン及び規模がほぼ明らかとなった。ただ、SX-1及び焼土塊遺構の関係、時期、性格等については多くの課題が残った。

年度末の調査でもあり、SX-1及び焼土塊が劣化しないよう埋め戻し、地権者に次年度に再調査を行うことを申し入れ、この部分について土地の借り上げを行うことで承諾を得た。



挿図3 第62次調査出土遺物実測図

第2節 第67次調査の成果

1 調査の経緯と経過

平成11年度に実施した62次調査で確認された焼土塊遺構（SX-1）については、その時期や性格は不明であった。極めて特殊な遺構であり、類例等も見あたらないことから稲刈り後、再調査を行うことで地権者である新野輝子氏の同意を得た。SX-1については耕作等によって傷むことがないように約150㎡を借り上げ、保存を図った。約半年間風雨等から守るため、県教委と協議しブルーシートで覆い耕作土等で埋め戻した。再調査は平成12年10月30日～同12月9日の期間実施した。

再調査ではSX-1を中心に周辺部に5カ所にトレンチを設け、周辺部に調査範囲を広げ実施した。

2 検出した遺構と出土した遺物

耕作土・床土直下の地山である黄灰色シルト上面において遺構検出を行った。遺構面の平均高は標高98.3mを測る。SX-1及びその周辺域に5つのトレンチを設定し、順次調査を行った。

T-1 SX-1及び焼土塊遺構を保存するために借り上げた部分がT-1である。SX-1及び焼土塊遺構の層位関係を把握するために11のグリッドを設定し、掘削調査を行った。

焼土塊遺構 焼土は東西2.6m、南北3.1mの範囲に広がっており、その中央には東西1.2m、南北1.5m程の楕円形の空白地のあることが判明した。焼土塊遺構の特徴は(1)ドーナツ状に広がっていること。(2)中心に向かってやや低くなっており、凹面状の断面形を呈すること。(3)上面のみ赤橙色を呈しており、原状を保っていると考えられること。(4)焼土塊遺構の上面及び周囲には全く炭・灰等が伴わず、常時火力をそこで使用する状況では無かったと考えられる。

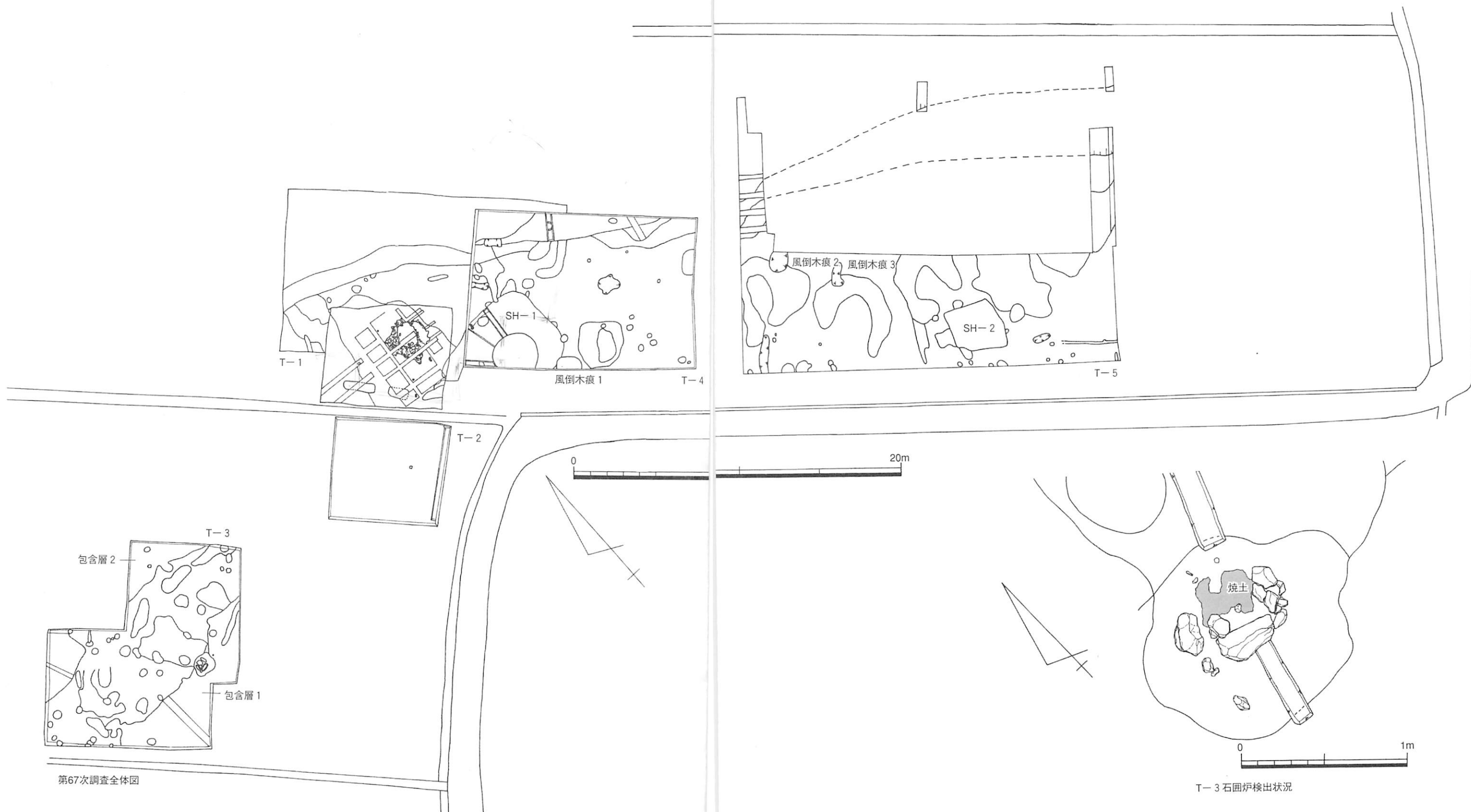
遺構の上面の埋土から出土した土器から弥生時代後期の遺構と考えられる。焼土塊はひび割れて5～10cm角ほどの板状であるが、本来は一体の構造物とみられる。地山であるシルトを浅く掘り窪め、良質な粘土を5～8cm程ドーナツ状に張り、上面から強い火力で燃焼を加え製作したものであろう。焼土塊遺構の埋土からは金属片等の痕跡がみられず、炭・灰を伴わないことから工房などに伴う遺構ともみられない。精良な粘土を貼り、表面を赤く発色するまで焼いた同遺構の性格や機能については不明であるが、常時火力を使用した結果ではなく、当初に燃焼を加え製作した構造物と考えざるを得ない。

SX-1 62次調査では、旧河道2に切り込まれた状態で明黄茶褐色粘質土の堆積が幅5m以上×9m以上にわたって検出されていた。今回、グリッドを設け掘削調査を行い、SX-1と焼土塊遺構及び旧河道2との関係を把握することに努めた。その結果、SX-1を切って旧河道2が形成されていることが判明したが、焼土塊との切り合い関係は明確ではなかった。深さ約20cmを測り、上層では明黄茶褐色粘質土、下層には暗赤褐色シルトの堆積が見られた。東から西側に向かってなだらかに落ち込んでいて、旧河道2に切り込まれている。下層を中心に縄文土器（1～4）及びサヌカイトチップ（6～8）が出土した。（1）は縁帯文を有する深鉢の底部と考えられ、縄文時代中期末～後期前半の北白川上層式の遺物とみられる。（2・3）は縄目痕を残す鉢体部の破片で、（4）は沈線文が施されている。これらの土器は北白川上層式の縄文時代中期末～後期前半なかで捉えられる土器群であり、SX-1の年代を推定する資料となる。今回の調査では、サヌカイトチップが出土しているほか、62次調査では石錘が見つかっており、SX-1は生活痕を強く残す遺構であり、堅穴住居である蓋然性が高い。

焼土塊遺構は縄文時代の堅穴と見られるSX-1が完全に埋没した上に、新たに弥生時代後期になって造られた構造物であったと考えられる。

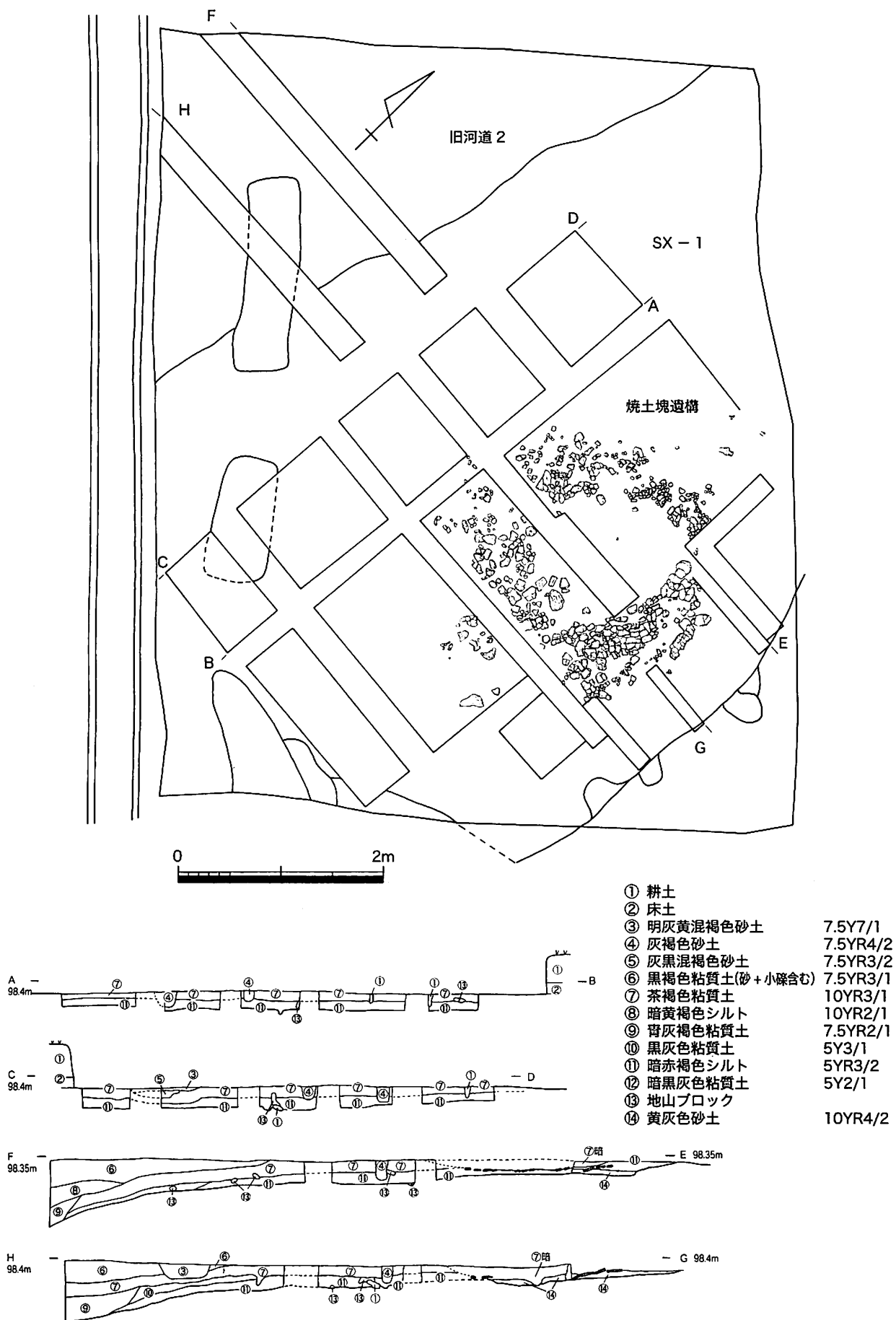
旧河道2 T-1の西隅で南北方向に伸びる落ち込みを検出している。掘削の結果、SX-1を切り込んで、緩やかに西側に向かって落ち込むことがわかった。西隅コーナー部では約75cmの深度があり、さらに落ち込むことが窺われる。出土土器には弥生後期の土器片があり、焼土塊遺構とほぼ同時期の遺構と考えられる。

T-2 T-1の南西隣側にT-2を設定した。旧河道2とSX-1の南側へののびかたを確認するために設定した。その結果、旧河道2と同様の埋土が全体に広がっていることが判明した。トレンチ南東側にサブトレンチを入れ確認した結果、南西側に向かって緩やかに落ちていくことが確認された。平成15年度の調査ではT-2の南側約70mの地点でも南北方向に伸びる幅10m前後の落ち込みが検出されており、同一の遺構である可能性が高い。南北方向にのびる幅10m前後の旧河道状の落ち込みがあり、

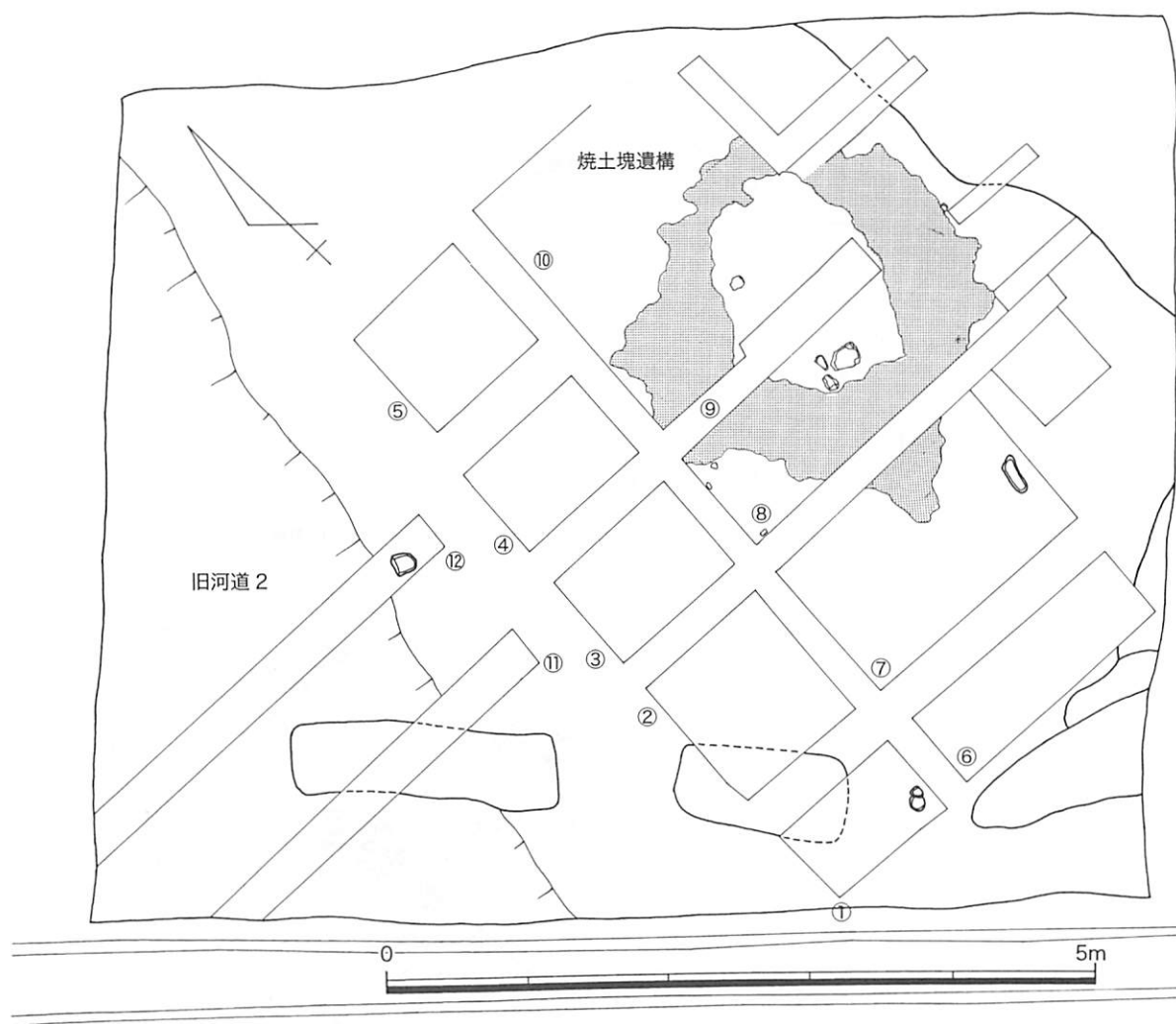


第67次調査全体図

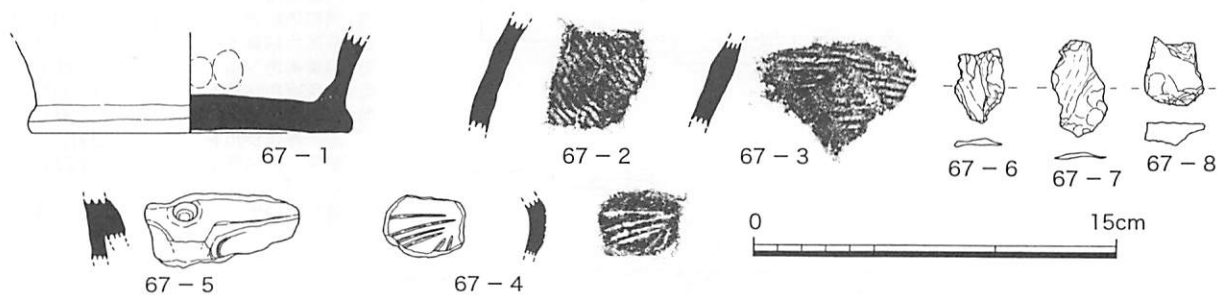
T-3 石囲炉検出状況



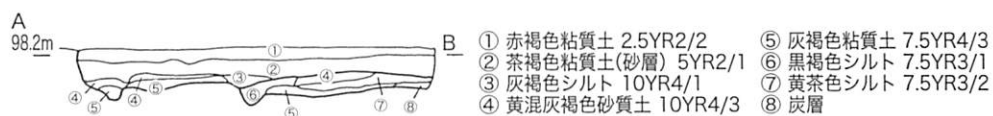
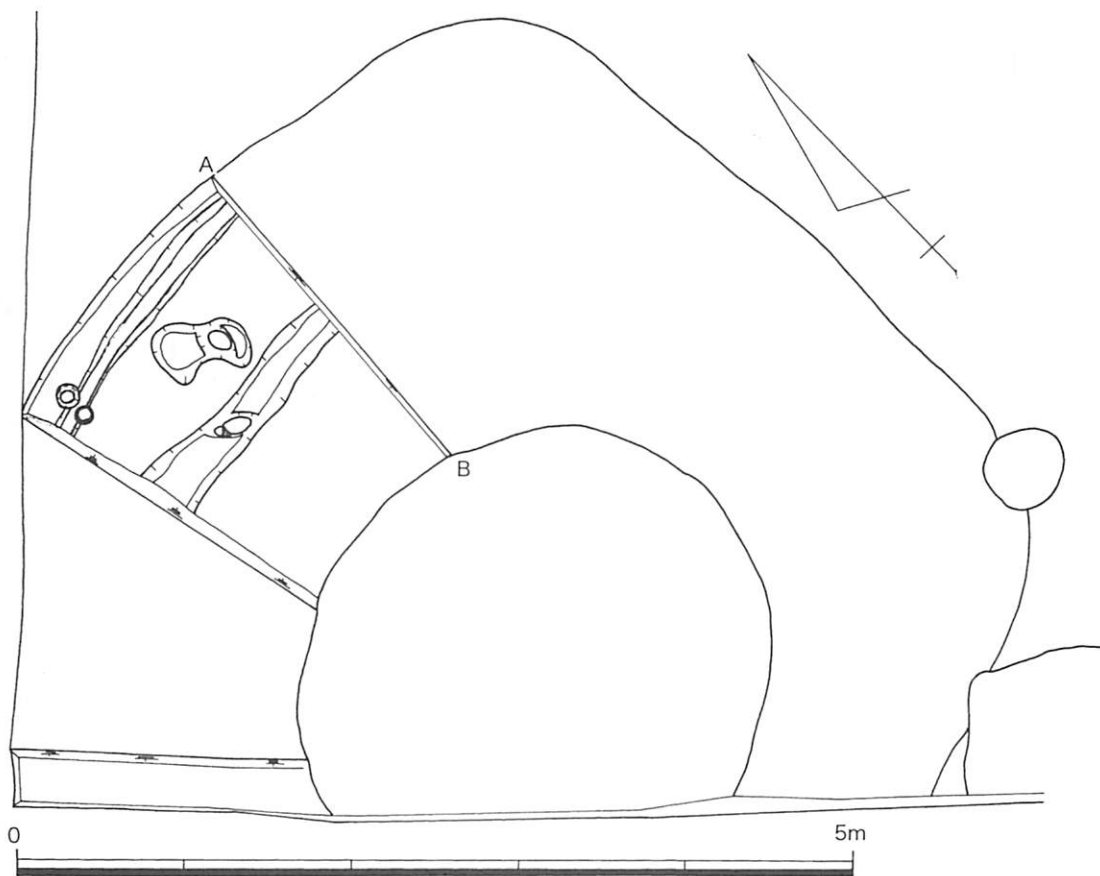
挿図 5 第 67 次調査 SX - 1 平面図・断面図



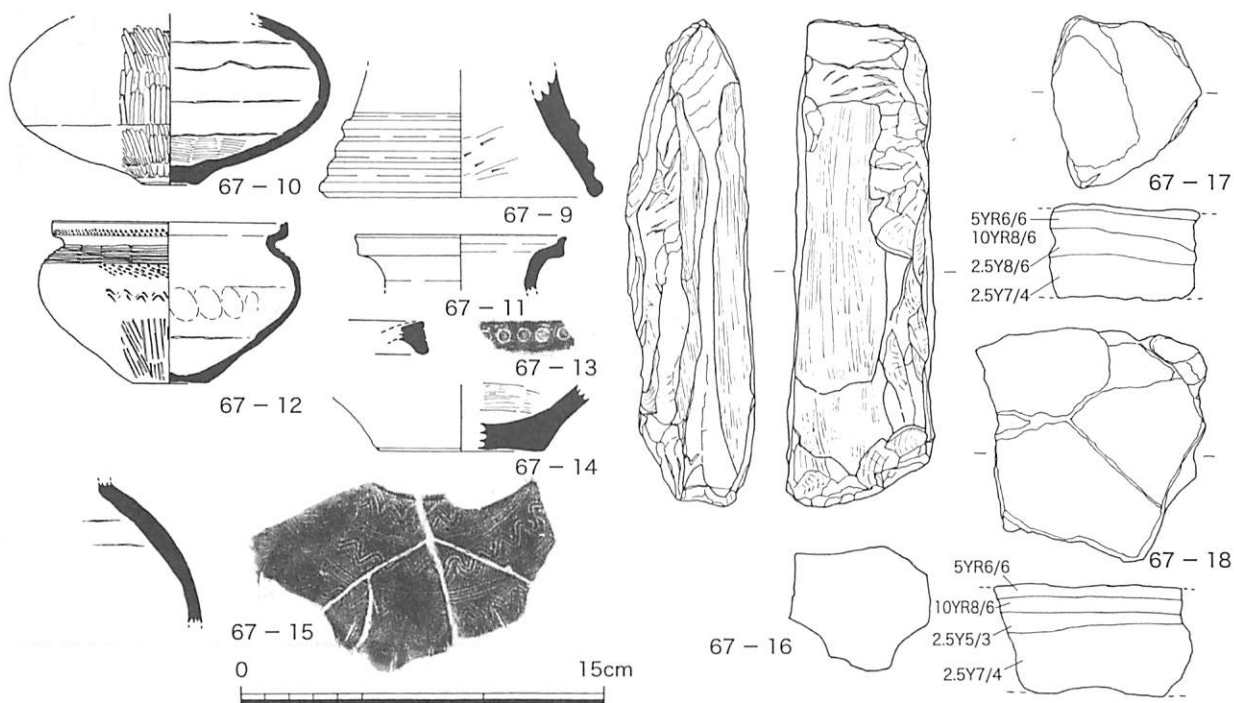
挿図 6 第 67 次調査 T-1 全体図



挿図 7 第 67 次調査出土遺物実測図



挿図8 第67次調査 SH-1 平面図・断面図



挿図9 第67次調査出土遺物実測図

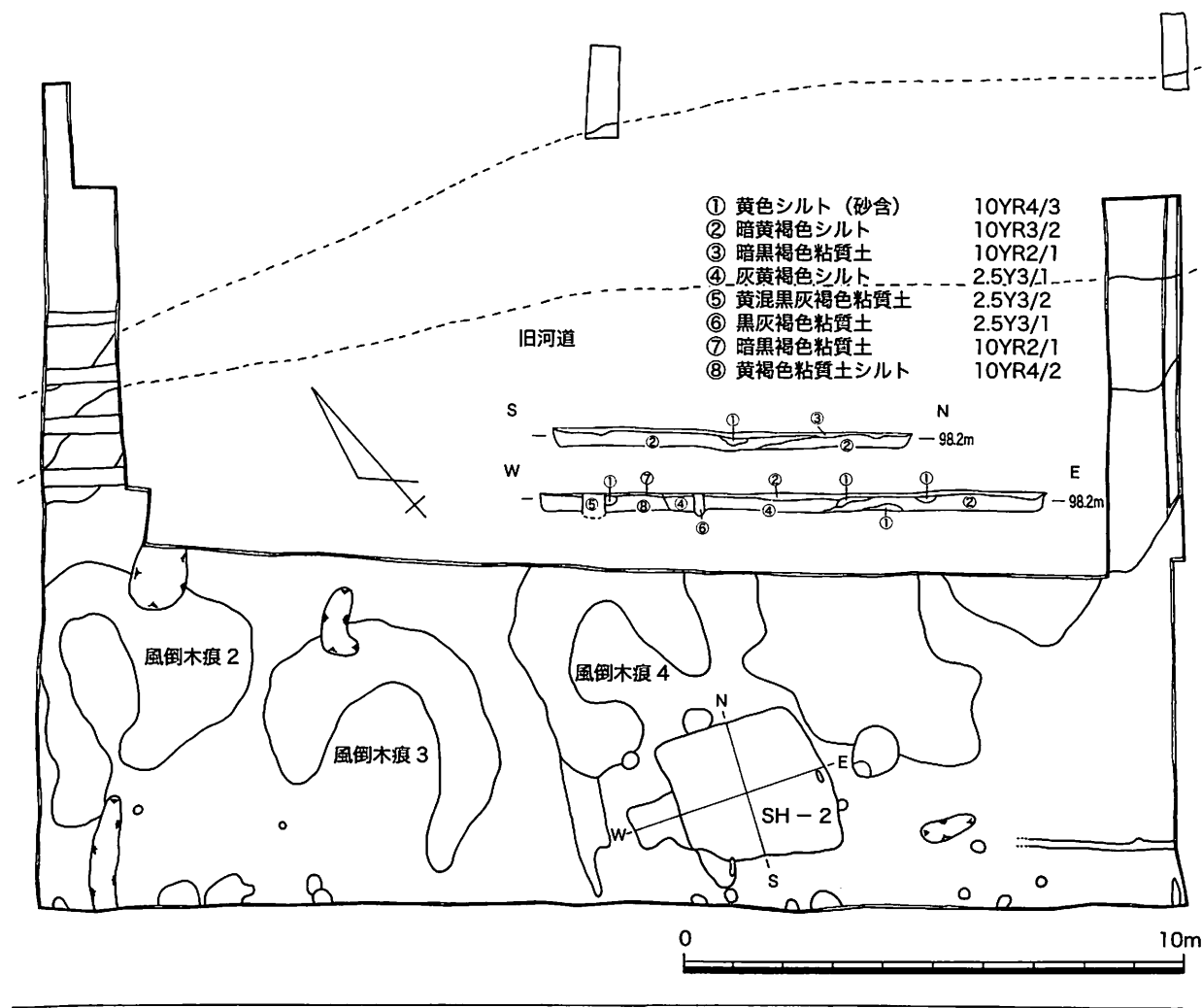
若干の凹凸をもつ肩部に遺物包含層が不定形に堆積しているものと考えられる。

T-3 T-2の西方にT-3を設定し調査を行った。その結果、トレンチ南隅と北隅において遺物包含層1・2を検出した。包含層1は旧河道2と同様の埋土で、東西方向に不定形に伸びている。一部掘削を行ったが5～10cmと浅く、肩部では下層の遺構の輪郭がみえるほどであった。包含層2も同様で、浅い遺物包含層が広がっているものと見られる。

石田炉 包含層1の肩部において長径1.2m程の浅い落ち込みを検出した。包含層1の肩部が浅く、下層の遺構の輪郭と考えるとよい。長方形の板石をコの字状に四角に組んだもので、内側の埋土には炭粒子が若干含まれていた。炉内からは縄文土器片(5)が出土している。(5)は橋状把手をもつ鉢の口縁部に近い土器片とみられ、縄文時代中期末の北白川上層式の年代が得られる。T-1のSX-1とほぼ同時代の遺構と考えられる。恐らく、縄文時代の堅穴住居が削平を受け、中央の炉のみが残存したものであろう。包含層1と2の空間地には多数の土坑・柱穴等が検出されているが、この住居に伴う遺構の可能性はある。

T-4 T-1の東側隣接地にT-4を設定し調査を行った。その結果、東西方向に伸びる旧河道1の上流側とT-1で部分的に検出していた堅穴住居SH-1などが検出された。

旧河道1 トレンチ北東隅において東西方向にのびる落ち込みの肩部を検出した。やはり、中央部には明灰茶色砂土が見られ、肩部には灰黒褐色粘質土が堆積していた。平成16年度の確認調査では、阿村町字下大洲で南北方向に弧状に伸びる幅4m、深さ約1mの人口の大溝が検出されている。同地点に向かって伸びることから、旧河道1の肩口に見られる黒褐色系の粘質土はこの溝の延長部で、古代・中世に埋まった川に切られている可能性があり、今後の調査で明らかにする必要がある。同一の遺構とすれ



挿図 10 第 67 次調査 T-4 平面図・断面図

ば、半径 150 m 程の円弧を描く区画溝が大型建物群の周囲に伸びていることになる。

風倒木痕 1 T-4 中央南隅において長径約 3 m を測る土坑を検出した。中央には地山よりもやや明るい黄色シルトが堆積し、周囲に黒褐色粘質土が見られた。

SH-1 T-4 南西隅において竪穴住居を検出した。南北辺 5.8 m を測り、隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居とみられる。一部、掘削調査を行った結果、残存壁高が約 25cm あることがわかった。住居中央には径約 3 m を測る中・近世の井戸とみられる遺構が切り込んでいた。壁際には幅 20cm、深さ 5 cm の溝が検出され、溝上面からはほぼ完形の弥生土器が 2 点出土した。壁際の溝から約 80cm 内側にも幅 30cm、深さ 5 cm を測る溝が検出されたが、同様に壁溝とみられる。先に内側の壁溝をもつ竪穴住居が先行してつくられ、後に同一地点で建て直されたものと考えられる。

内側の壁溝内からは (9) の土器が出土している。器台脚部で、裾部に 4 条の凹線文が施されている。内面には粗い篋削りがみられ、弥生時代中期末の年代観が得られる。外側の壁溝の上面からは (10・12) の土器が出土している。(10) は口縁部を欠く細頸壺の体部である。扁平な体部で、小さなやや突出する上げ底の底部が付く。外面は縦方向の丁寧な篋磨きが施され、内面底部には刷毛、体部内面には輪積み痕が残る。(12) は受口状口縁を有する小型の浅鉢である。やや肩の張る体部に短く屈曲し、やや内傾気味に短く立ち上がる口縁部が付く。口縁部外面下端には列点文、肩部から腹部にかけては櫛描直線文・列点文・波状文が施されている。外面には縦方向の刷毛目が施され、内面にはつなぎ痕、指頭痕が観察される。後期中葉でもやや新しい特徴をもつ個体である。この他、埋土内からは (13～15) の弥生土器が出土した。(11) は受口状を呈する小型の壺口縁部である。無文で、全体に横ナデで仕上げられている。(13) は器台口縁部とみられ、口縁部外面に円形の竹管文が密に施されている。(14) は壺底部とみられ、突出しない上げ底である。内面に篋削りが施されている。(15) は壺体部で、肩部に櫛描直線文と波状文が交互に施されている。これらの土器群は後期中～後葉の特徴をもつもので、竪穴住居廃絶の年代観を示すものである。同じく埋土内からは砥石 (16) が出土している。細長い石材の上面及び側面に使用痕がみられ、細かい擦痕が観察される。形状からすると磨製石斧などを転用した可能性がある。

T-5 T-4 の南東側にトレンチ 5 を設定し調査を行った。調査の結果、旧河道 1 の延長部と竪穴住居 SH-2、風倒木痕等が検出された。

旧河道 1 旧河道 1 の東側への広がりを押さえるため、東西 2 カ所でトレンチの拡張を行った。その結果、灰黄茶色砂土の埋土は東側へ直線的に伸びることがわかった。T-1・4 で肩際に若干確認された灰黒褐色粘質土は東へ行くに従って広くなり、やや南側に振ることがわかる。平成 16 年度の確認調査でみつかった大溝の方向へ向かっており、旧河道とは異なる遺構が重複している可能性が高い。

風倒木痕 2～4 調査区中央で東西方向に 3 つ並ぶ楕円形の土坑を検出した。3 つとも南西から南側に地山土が起きた状態で検出されており、風倒木痕とみられる。

SH-2 トレンチ中央において台形状の平面プランをもつ土坑を検出した。埋土は灰茶褐色粘質土で、SH-1 と共通する。長径 4 m、短径 3 m を測り、小型の竪穴住居と考えられる。

3 調査成果のまとめ

今回の調査は 62 次調査の再調査であり、特に焼土塊遺構の性格・時期等を押さえるために行ったものである。焼土塊遺構は弥生時代後期の遺構であり、SX-1 が縄文時代中期末～後期前半の遺構であることが判明し、別の時期の遺構が重複していることが明らかになった。その性格については不明であるが、その後阿村町字下大洲で平成 13・14 年度に発見され調査された大型竪穴建物の床面に酷似する遺構が存在することがあきらかになった。今回の焼土塊遺構も住居床面に付設された遺構の一部である可能性が高いと考えられる。当初、工房等の可能性があるものと考え、その痕跡を追ったがそれを積極的に傍証する遺物や遺構が検出されなかったことから、現時点ではそのように理解される。

この他、縄文時代中期から後期前半の石囲炉や SX-1 等が検出され、縄文時代の竪穴住居等が存在することも明らかになった。さらに、弥生時代後期及び弥生中期末の竪穴住居が存在することが明らかになった。また、旧河道 1 に切られた大溝が今回の地点に存在する蓋然性が高く、今後、阿村町字下大洲から伸びる大溝との関係を捉えていく課題が残る。

第3節 第69次調査の成果

1 調査に至る経過

昭和56年に行われた第2次調査では多数の竪穴住居、土壇、柱穴等が検出された。調査地の北西側隅において、南北方向に伸びる溝が約10mにわたり検出されていたが、平成11・12年度の調査によって大型竪穴住居群を区画する区画溝である蓋然性が高いと判断されたことから（伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ所収）、地権者である山川亜夫氏の承諾を得て確認調査を行った。調査は平成13年1月15日～同1月31日の期間実施した。

2 検出した遺構と出土遺物

耕作土・床土を除去し、遺物包含層上面で遺構検出を行った。調査地には厚さ10～15cm程の古代末から中世にかけて形成されたと見られる包含層が堆積しており、現伊勢集落のある西側へ向かって地形的に落ちることがわかった。トレンチ隅3カ所において断ち割りを行い、下層の確認を行った。

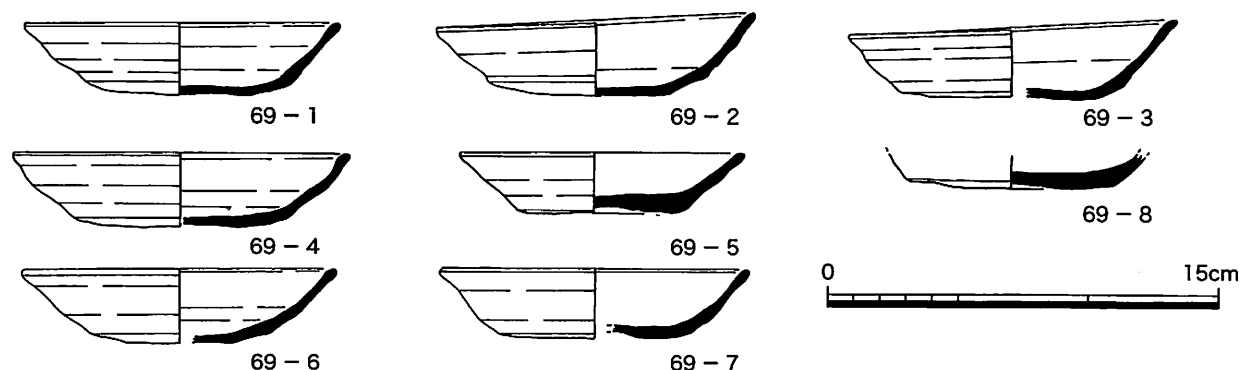
耕土・床土を除去し、暗茶褐色粘質土（遺物包含層）上面で遺構検出を行った。その結果、栗太郡地割りに沿って、南北方向に伸びる小さな溝を検出した。溝内には灰白黄色砂土が堆積しており、近世の耕作痕とみられる。この他、耕作痕を切って竹で作られた暗渠排水が検出された。粘質土（遺物包含層）が厚く堆積しており、水捌けが悪かったことが想定される。地元での聞き取りによれば、昭和初期に暗渠排水が伊勢町一帯で行われたらしい。

暗茶褐色粘質土（遺物包含層）内には多数の土師器や須恵器が含まれており、下層確認については最小限にとどめ、3カ所にサブトレンチを入れ区画溝の位置を特定した。断割り1からは（1～3）、断割り2からは（4～7）の土師皿、平面検出時に（8）の土師皿が出土した。いずれも直径12～14cm、深さ2.5cm前後の土師皿で10世紀後半～11世紀前半頃の年代が得られる。

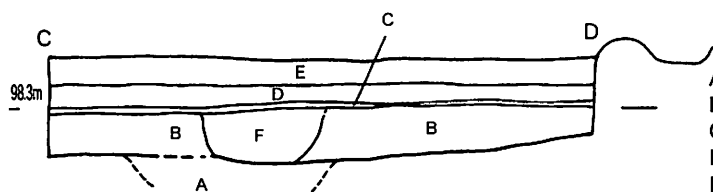
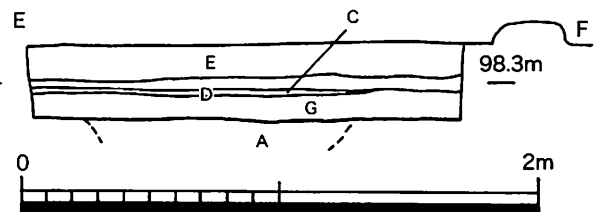
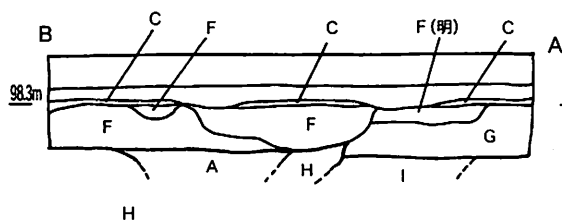
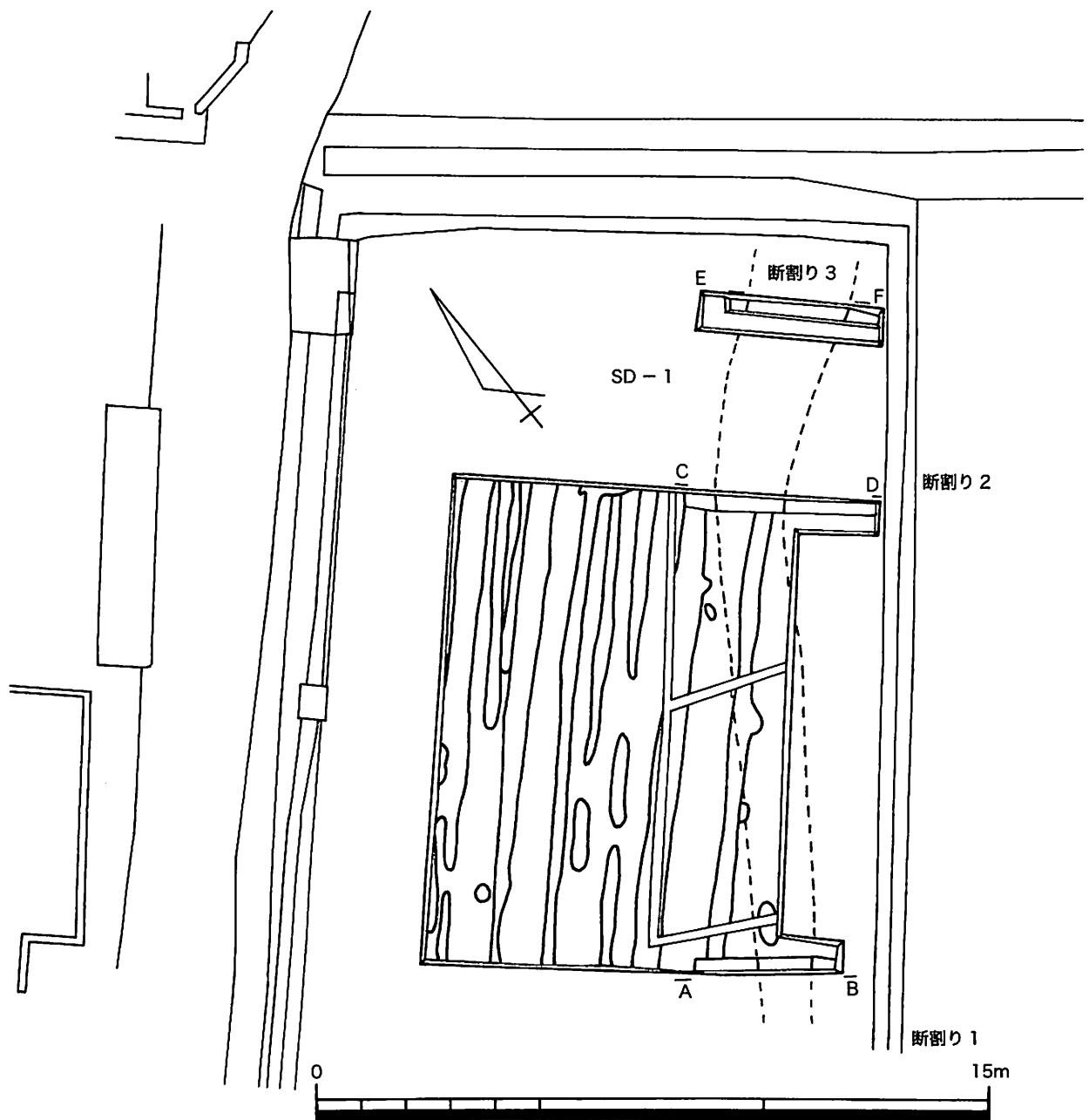
3カ所の断割りの結果、区画溝がそれぞれの地点で確認された。溝内には暗黒褐色粘質土が堆積しており、溝幅は約1mを測ることがわかった。地割りに沿って、南西から北東に向かって伸びるが、調査地東隅でやや東へ振っている。位置関係から、第2次調査で確認された下層遺構の溝の延長部とみられる。

3 調査成果のまとめ

第2次調査で検出された下層の溝が、その後の確認調査で一辺約110m程の方形区画の溝である可能性があり（伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ 2004）、その延長部を押さえるために今回の調査を行った。予想通り、第2次調査地点から北側へと溝が確認されたが、59・61次調査で検出された溝と同一であれば100m四方を方形に区画し、内部には大型建物が廃絶した後、一辺9m前後の大型竪穴住居群が営まれるという景観が復元される。今後、北東辺の区画溝の確認が課題となる。



挿図11 第69次調査出土遺物実測図



- | | |
|--------------------|--------------------|
| A 暗黒色粘質土 5YR1.7/1 | F 暗灰褐色粘土 2.5YR3/2 |
| B 暗黒褐色粘質土 2.5YR3/1 | G 暗茶褐色粘質土 |
| C 灰褐色砂含土 (マンガン粒含) | H 黒灰褐色粘質土 |
| D 床土 | I 灰茶褐色粘質土 |
| E 耕土 | (地山ブロック含) 7.5YR3/1 |

挿図 12 第 69 次調査平面図・断面図

第4節 第72次調査の成果

1 調査の経緯と経過

平成13年4月11日付けで伊勢町在住の小田宏氏から、伊勢町626番地の水田地（798㎡）で共同住宅建設にあたり埋蔵文化財発掘届が提出された。開発地は区画整理内で、周辺の調査によって旧河道・溝等が検出されるものと予想された。市教委では開発に先立ち確認調査を実施し、事前に遺構の有無等の把握に努めた。計画建物は3階建て、パイル基礎が2列に入るため遺構が検出された場合、この部分については掘削調査を原因者負担で実施する必要があることを開発者に伝えた。

調査については平成13年7月2日～同7月6日の期間実施した。

2 検出した遺構

約40cmの耕作土及び床土・灰茶色砂土を除去し、黄色シルト上面において遺構検出を行った。平均遺構面は97.2mであった。遺構検出の結果、トレンチ南西側で旧河道の一部を検出し、北東側では緩やかな落ち込み、トレンチ中央では溝などが検出された。

旧河道 トレンチ南西隅においてその一部を検出した。トレンチ方向に直交し、東西方向に伸びることが予想された。幅6.4m以上、深さ約60cmを測り、灰褐色系の粘質土の堆積がみられた。遺物は殆ど含まれていなかったが、土質及び周辺部の調査成果からみて中世の河川跡と推定される。

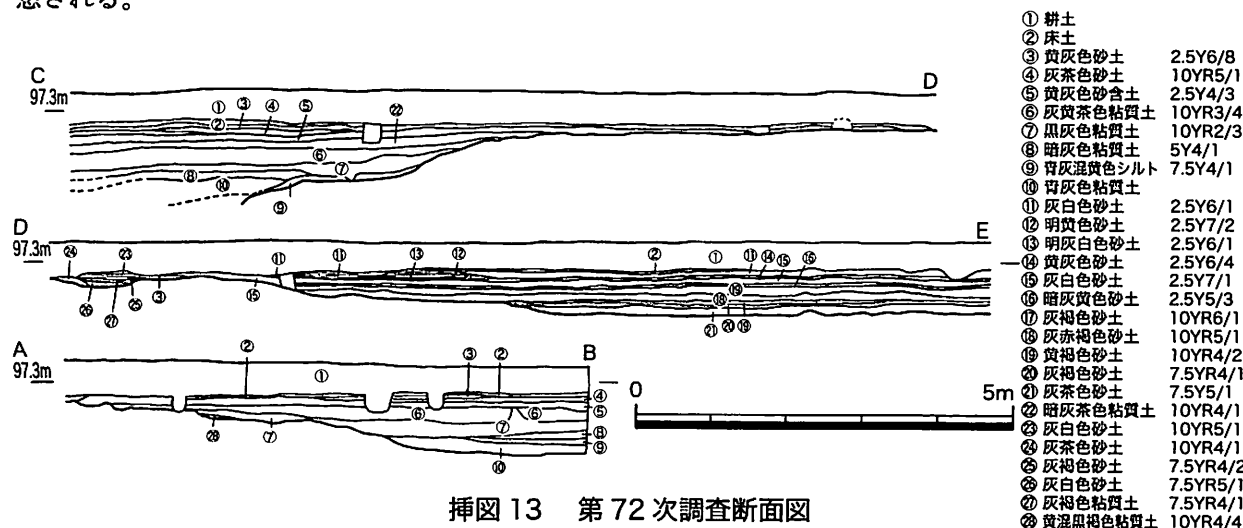
落ち込み1 トレンチ北東隅に向かって緩やかに落ち込む地形を幅10m以上にわたって確認した。灰茶色粘質土及び灰白色砂土の堆積が見られ、一時的に水が流れていたことが予想された。調査地の北東側には井上川が流れており、それに向かって地形的に落ちていくと見られ、低い地形に粘土及び砂が堆積したものと考えられる。トレンチ中央で約10cm程落ち込み、約3m余りフラットとなり、それから急激に深くなり、北東隅では深さ約80cmの土砂の堆積が見られた。旧河道と同じく中世に埋没したものと思われる。

溝（SD-1） トレンチ中央において落ち込み1及び旧河道に並行し、東西方向に伸びる溝を検出した。幅0.9m～2m、深さ約8cmを測り、断面形は浅い椀状を呈する。灰褐色粘質土の堆積がみられ、中世の溝跡と考えられる。

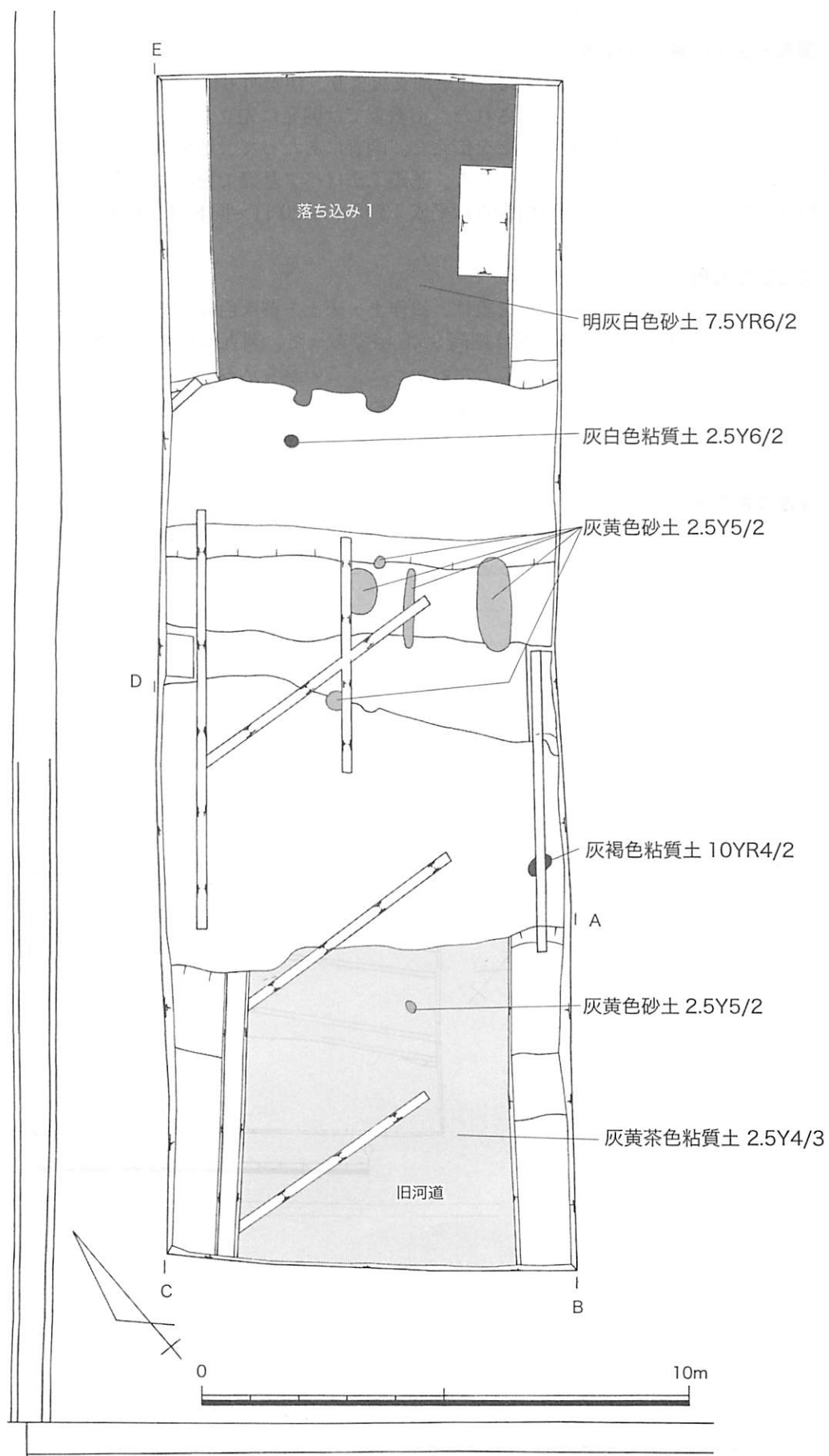
この他、近代に埋設されたと思われる暗渠跡や耕作痕が若干検出された。

3 調査成果のまとめ

今回の調査では弥生時代に遡る遺構は全く見られず、中世及びそれ以降の遺構が若干検出されたに留まった。区画整理地内の南東浦地区には中世の掘立柱建物群が数多く見つかっており、屋敷のまわりには区画溝なども見られる。鎌倉時代から室町時代（12世紀末から14世紀）にかけての集落跡と推定されるが、今回の調査地点はその集落の南西側にあたり、同地点には水路や川があったと考えられる。旧井上川を挟んで弥生時代の遺構が殆ど見られなくなる傾向があり、地形的境界となっていたことが予想される。



挿図 13 第72次調査断面図



挿図 14 第 72 次調査平面図

第5節 第73次調査の成果

1 調査に至る経緯及び経過

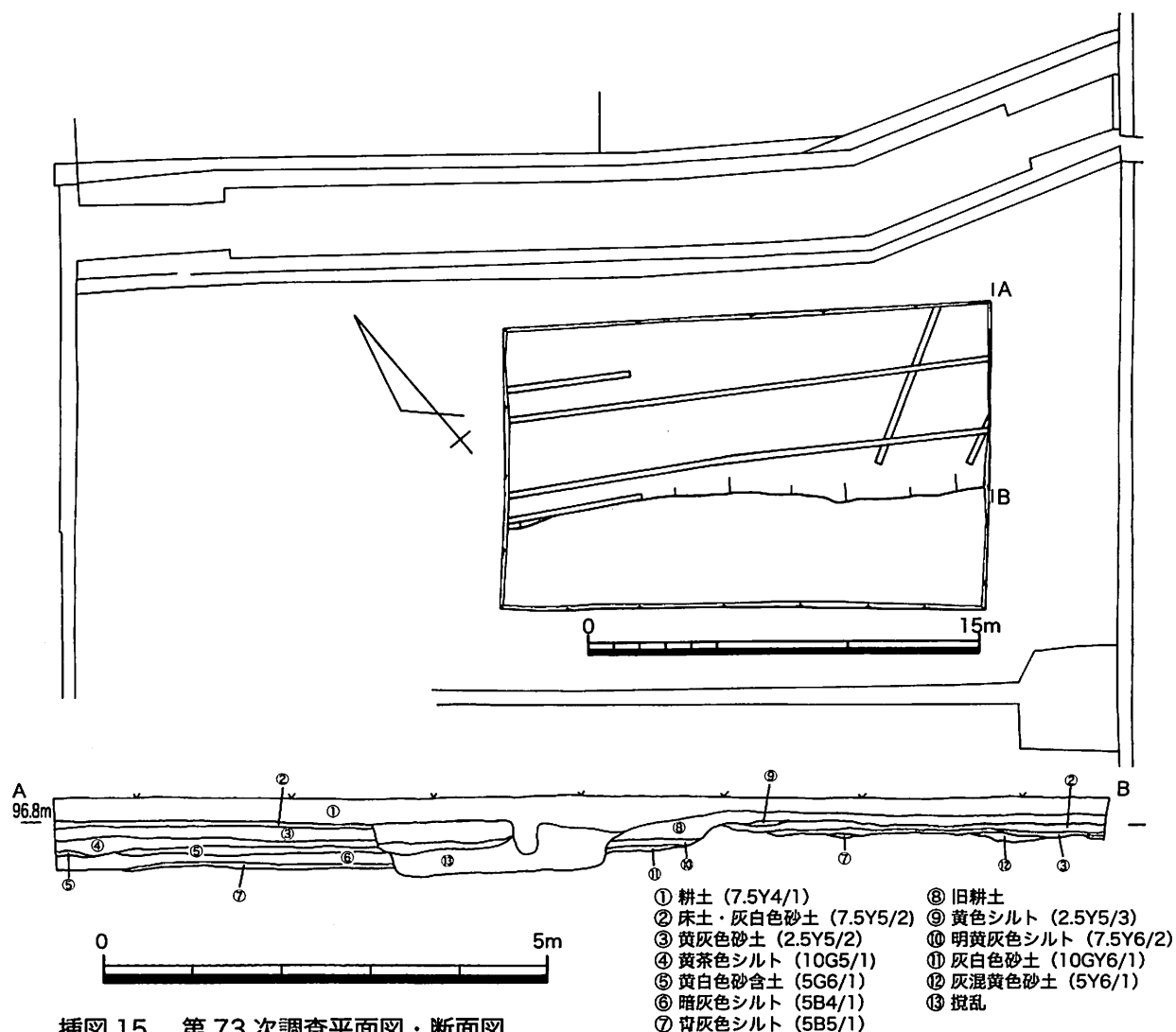
平成13年6月1日、生和建設株式会社京都支店より、伊勢町613・614番地の水田地で共同住宅建築に先立ち埋蔵文化財発掘届が提出された。市教委では開発に先立ち確認調査を実施し、遺構の有無を含めて事前に調査する必要があることを伝えた。調査にあたって、地権者である栗東市野尻町在住の吉田誠一郎氏の承諾を得て確認調査を行った。基礎工法はベタ基礎で掘削が造成土内で止まるため、遺構への影響はないと判断された。現地調査は平成13年8月20日～同8月29日の期間実施した。

2 検出した遺構

マンション建築予定地にトレンチを設け、耕作土・床土・黄灰色砂土を除去し、黄色シルト上面で遺構検出を行った。遺構面の平均高度は標高96.6mであった。調査の結果、調査区北東側に向かって幅7m以上にわたり地形的に落ち込むことがわかった。この落ち込み部分には灰茶色粘質土の堆積がみられ、その部分に暗渠が埋設されていた。粘土の堆積によって水捌けが悪かったことが推測される。同地点においても弥生時代の遺構等は全く見られなかった。

3 調査成果のまとめ

同調査地点は72次地点の南東約50mの地点にあたり、井上川に隣接する地点である。72次地点と同様に井上川に向かって地形的に落ち込んでいくことが確認された。弥生時代の遺構は見られず、中世の遺構も検出されなかった。



挿図 15 第73次調査平面図・断面図

第6節 第76次調査の成果

1 調査に至る経過

平成14年1月21日付けで、有限会社小森不動産より伊勢町字南東浦602-1番地の水田地において駐車場等の造成に先立ち埋蔵文化財発掘届が提出された。開発予定地は区画整理内でも北東部にあたり、中世を中心にした遺構が広がっていることが予想された。市教委では開発にあたり、事前に確認調査を行う必要があることを伝え、造成にあたっては山砂等の保護層を設け遺構の保存を図るよう指導した。

現地調査については平成14年2月7日～同2月8日の期間実施した。

2 検出した遺構

耕作土・床土直下の黄色シルト上面で遺構検出を行った。遺構面の平均高度は標高97.7mであった。調査の結果、中世の掘立柱建物、柱列、土坑等を検出した。調査区の南東側及び南西側は地形的に大きく落ち込み、既往の調査によって旧河道が存在することがわかっている。

S B-1 調査区中央で4間×3間以上の規模をもつ掘立柱建物を検出した。柱穴距離は約2mを測る。建物南東側は旧河道によって失われているほか、建物柱穴も削平されその幾つかは失われているものとみられる。柱穴平面より出土した土器片から鎌倉時代の建物と推定される。

S B-2 S B-1に一部重複して3間以上×4間以上の規模をもつ建物跡を検出した。調査区南東側外へとひろがっており、規模等は不明である。柱穴は一辺30～40cmの方形で、ややS B-1より大きい。一部、S B-1の柱穴を切っており、S B-1の後に建て替えられた建物と考えられる。出土土器片等から鎌倉時代の建物とみられる。

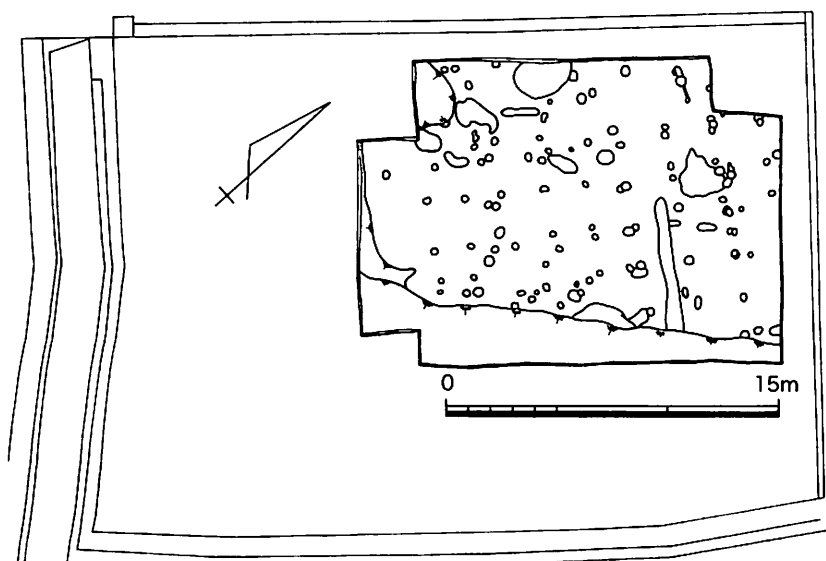
柱列1 S B-1の北西側で、建物に平行する柱列を検出した。S B-1の底など付属施設の一部とみられる。

柱列2 調査区北隅において検出した。4本の柱跡が等間隔に並ぶが、建物を復元するには至らなかった。調査区周辺はかなり削平を受けており、消失した柱穴も多かったと考えられる。

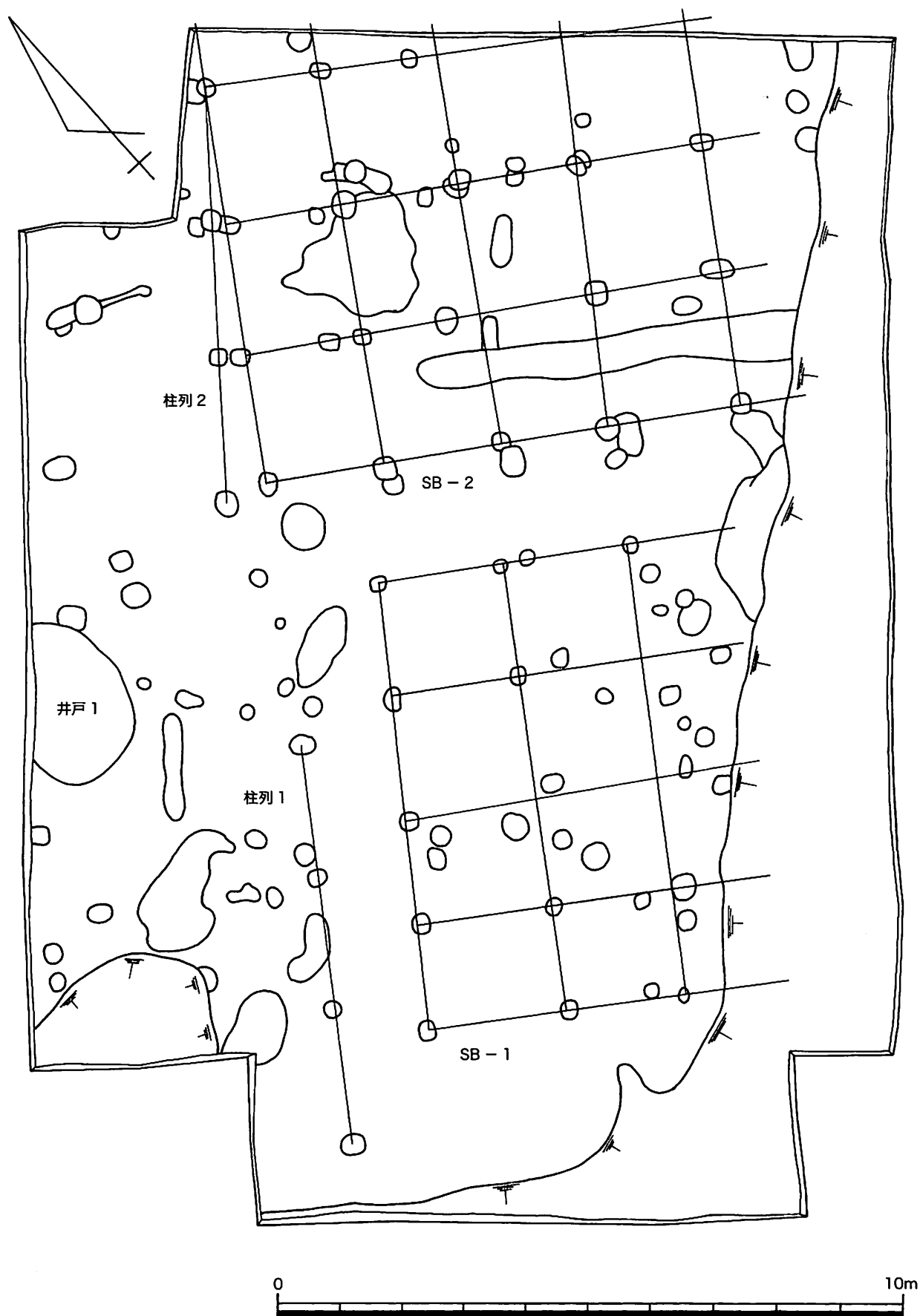
井戸1 調査区西隅においてその一部を検出した。直径約3m程あり、灰白黄色砂土が堆積していた。屋敷地の一角に付設された井戸とみられる。

3 調査成果のまとめ

同調査地点周辺の南東浦地区には鎌倉時代～室町時代にかけての建物跡が多く見つかっている。梁・桁行きが7～9間程ある比較的規模の大きな建物が多く井戸を持ち、屋敷地周辺には区画溝を伴っている。このような屋敷地が幾つも連結し集落が形成されていたと考えられる。中東浦地区から南東浦地区までのかなり広い範囲に集落が広がっていたと推定される。



挿図 16 第76次調査平面図



挿図 17 第 76 次調査平面図

第3章 出土遺物観察表

本報告出土遺物について以下、観察表で詳細を報告する。色調は標準土色帳（農林省土木局監修）によって記載した。法量における（）は復元径であることを示している。

番号	出土地点	形式	法量	形態的特徴	調整・文様	色調
62次調査						
1	1	壺底部	底径 (10.0 cm)	やや突出する平底。	底部は粘土板を置き粘土紐を積み上げて整形する。	内外 橙 5YR6/6 赤褐 5YR4/6
2	2	高坏脚中部	脚中径 (3.4cm)	円筒状の脚中部。	内外面とも不明。	内外 橙 5YR7/8 橙 2.5YR7/6
3	3	高坏脚中部	脚中径 (3.2cm)	円錐状に開脚する脚中部。	内外面とも不明。	内外 橙 2.5YR6/8 橙 2.5YR6/8
4	4	焼土塊	長径 (10.5 cm) 短径 (8.2cm)	上面に径 2 cm、深さ 1.8cm の小さな孔をもつ。	上面は橙色に発色する。	内外 におい褐 7.5YR5/3 橙 5 Y R 6/8
5	5	焼土塊	長径 (7.5 cm) 短径 (7.2cm)	上面に径 1.5cm、深さ 1.0cm の小さな孔をもつ。	上面は橙色に発色する。	内外 灰黄褐 10YR4/2 橙 2.5YR6/8
6	6	焼土塊	長径 (8.0 cm) 短径 (6.5cm)	上面は概ねフラットであるが、小さな凹凸をもつ。	上面は橙色に発色する。	内外 灰褐 7.5YR4/2 橙 5YR6/6
7	7	焼土塊	長径 (8.0 cm) 短径 (5.0cm)	上面は概ねフラットであるが、小さな凹凸をもつ。	上面は橙色に発色する。	内外 灰褐 7.5YR4/2 橙 5YR6/6
8	8	砥石	長径 (17.0 cm) 短径 (6.1cm)	板状の川原石を利用。上・下面及び側面に使用痕が残る。砂岩。		内外 褐灰 10YR6/1
9	9	石垂	長径 (5.7 cm) 短径 (3.7cm)	平らな板状の石の上・下端を打ち欠き整形。砂岩。		内外 褐灰 10YR5/1
67次調査						
1	SX-1 下層	鉢底部	底径 (13.1 cm)	大きな平底の底部で下方に拡張。	内面に指頭痕	内外 におい褐 7.5YR7/6 橙 5 Y R 6/6
2	SX-1 下層	鉢腹部	不明		外面に縄目文	内外 橙 5YR6/6 におい赤褐 5YR5/4
3	SX-1 下層	鉢腹部	不明		外面に縄目文	内外 橙 5 YR6/6 におい赤褐 5 YR5/4
4	SX-1 下層	鉢	不明		刻線文が施される。	内外 ともににおい黄橙 10YR7/3
5	石囲炉 5	鉢	不明		釣り手状の文様	内外 褐灰 10YR6/1 におい黄橙 10YR6/3
6	SX-1 下層	サヌカイト チップ	長径 2.8 cm / 短径 2.0 cm / 厚さ 0.3 cm			内外 灰 N 4 / 1
7	SX-1 下層	サヌカイト チップ	長径 4.0cm / 短径 2.1cm / 厚さ 0.2cm			内外 灰 N 4 / 1
8	SX-1 下層	サヌカイト チップ	長径 2.5 cm / 短径 2.3 cm / 厚さ 0.9 cm			内外 灰 N 4 / 1
9	SH-1	器台脚部	脚径 (11.7 cm)	八の字状に短く開脚。脚端は円頭状に納める。	裾部に 4 条の凹線文。	内外 ともににおい黄橙 10YR8/3
10	SH-1	細頸壺	腹径 13.2 cm 底径 2.3cm	扁平球型の体部をもち、底部はやや突出する小さな上げ底。	外面は縦方向の篋磨き。底部内面に横刷毛。内面につなぎ痕が残る。	内外 黄灰 2.5Y5/1 明褐灰 7.5YR7/2
11	SH-1	広口壺	口径 (8.5 cm)	垂直に立ち上がる頸部から外方へ短く屈曲した後、肩部を短くつまみ上げ口縁部を形成する。	内外面とも不明。	内外 ともに浅黄橙 10YR8/3
12	SH-1	浅鉢	口径 9.5 cm 器高 6.6cm 腹径 10.8cm	浅鉢としては小型品である。やや丈高の体部で口縁部は短く垂直に伸びる。	体部外面は縦刷毛。内面につなぎ痕、指頭痕が残る。口縁部に列点文。肩部から体部にかけて御描直線文、列点文、波状文が施されている。	内外 におい黄橙 10YR7/3 におい黄橙 10YR6/3
13	SH-1	器台	不明	逆三角形状に垂下する口縁部。	口縁部外面に竹管文が施される。	内外 ともににおい黄橙 7.5YR6/6
14	SH-1	壺底部	底径 6.8 cm	突出しない上げ底。	底部内面に篋削り。	内外 ともに橙 5YR6/6
15	SH-1	壺体部	不明	球形の体部をもつ壺の肩部。	肩部に御描波状文と直線文が交互に施される。	内外 灰黄褐 10 Y R 6/2 橙 7.5 Y R 7/6
16	SH-1	砥石	長径 20 cm / 短径 5.9cm / 厚さ 5.1cm		上下面及び側面に使用痕が認められる。表面に細かい削痕が残る。	内外 ともに灰 10Y5/1
17	焼土塊遺構	焼土塊	長径 7.1 cm 短径 6.0cm 厚さ 4.0cm	上面はフラットで、細かいひび割れが見られる。	上面は橙色に発色する。	上 灰黄褐 10YR5/2 中 橙 7.5 Y R 6/6
18	焼土塊遺構	焼土塊	長径 9.0 cm 短径 8.6cm 厚さ 4.5cm	上面はフラットで、細かいひび割れがみられる。	上面は橙色に発色する。	上 灰黄褐 10YR5/2 中 橙 7.5 Y R 6/6
69次調査						
1	断ち割り 1	土師皿	口径 (12.0 cm) / 器高 (2.8cm)		内外面伴に指なで。	内外 ともに橙 5YR7/8
2	断ち割り 1	土師皿	口径 (12.2 cm) / 器高 (2.9cm)		内外面伴に指なで。	内外 ともに橙 5YR8/4
3	断ち割り 1	土師皿	口径 (12.5cm) / 器高 (2.7cm)		内外面伴に指なで。	内外 ともに橙 5YR6/8
4	断ち割り 1	土師皿	口径 (12.7cm) / 器高 (2.9cm)		内外面伴に指なで。	内外 ともに黄橙 7.5YR7/8

番号	出土地点	形式	法量	調整・文様	色調
5	断ち割り2	土師皿	口径(10.7cm) / 器高(2.4cm)	内外面伴に指なで。	内 におい橙 5YR6/3 外 橙 5 YR6/6
6	断ち割り2	土師皿	口径(11.9cm) / 器高(4.4cm)	内外面伴に指なで。	内 橙 5YR6/6 外 浅黄橙 7.5YR8/4
7	断ち割り2	土師皿	口径(11.8cm) / 器高(2.7cm)	内外面伴に指なで。	内 橙 5YR7/6 外 橙 5YR7/4
8	平面検出	土師皿	口径・器高不明	内外面伴に指なで。	内 浅黄橙 7.5YR8/3 外 におい橙 5YR7/4

第4章 調査成果のまとめ 一焼土塊遺構の性格について一

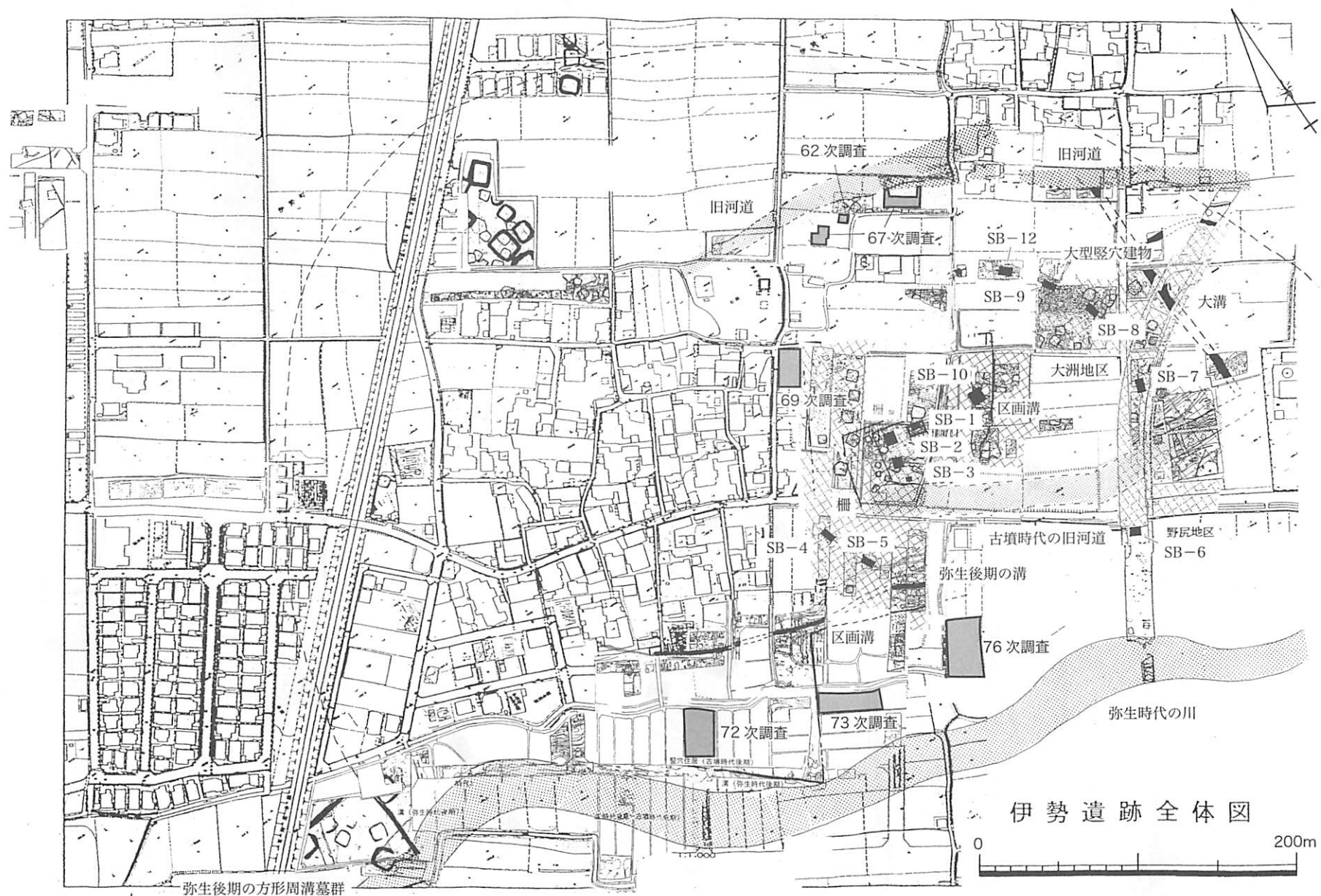
本報告では伊勢遺跡の北東部にあたる確認調査分と区画整理地内での開発に先立つ確認調査分を収録している。区画整理地内の伊勢町字南東浦地区では、既往の調査で平安時代末から室町時代にかけての集落跡が確認されており、建物規模も大きく有力な土豪層が居住していたことが推測されていた。中東浦地区では平安時代から鎌倉時代にかけての建物が多く検出されており、若干時代によってその中心域が異なると予想される。また、字南代から南東浦地区では弥生時代後期に遡る遺構は少なく、空白地帯であったと推測される。以下、平成11・12年度に実施した焼土塊遺構について若干の考察を加え結びとしたい。

平成11年度末に実施した確認調査(62次調査)において、焼土塊遺構が検出された。その形状や様相は特異であり、不明な点が多かったことから平成12年度に改めて確認調査を実施した。その結果、(1)弥生時代後期の遺構であり、縄文時代中期末～後期前半のSX-1とは別の遺構であること。(2)直径2.5m程の浅い窪みに構築された遺構であること。(3)精良な粘土を5～8cm程ドーナツ状に張り、上方から強い火力を加え赤橙色に発色するまで焼いていること。などの特徴をもつことがわかった。当初、強い火力をうけていることから、金属工房などの可能性があるかと判断し、埋土中に金属片がないか土を洗浄したが全く含まれていなかった。また、鑄造等に係わる真土とも考えられたが、上面のみが赤く発色し、検出状況からみて焼土塊遺構が原状を保っていると判断されたため、遺構として造営されたものであると考えざるを得なかった。さらに焼土塊表面及び埋土に蛍光X線分析を繰り返し行なったが、特定の金属反応は見られなかった。また周辺部の調査でも鑄造関連遺物も出土しないことから、工房等の施設とは異なると判断された。

また、強い火力を受けていることから、炉として使用されたことも想定されるが、焼土塊内やその周辺部にはまったく炭や灰が残存していないこと、焼けた石や土器が伴わないことなどから恒常的に火を使用する施設とは異なるものと推測された。

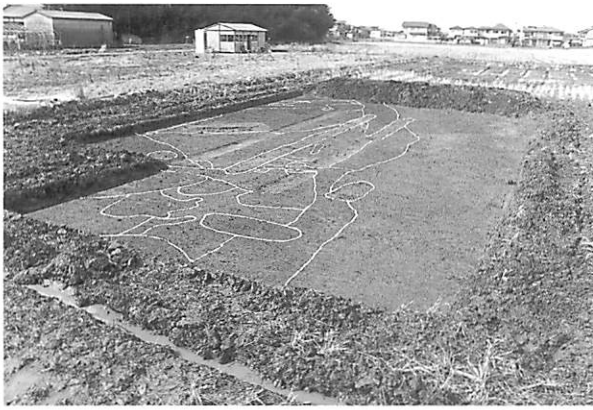
焼土塊遺構の機能や性格については現段階においては不明といわざるを得ないが、平成13年度に阿村町字下大洲で実施した確認調査で酷似する遺構が検出された。第74次調査では一辺13.6mを測る大型竪穴建物が検出された。同調査では細長いサブトレンチを入れ、住居の床の一部に同様の焼土塊遺構が存在することがわかり、平成14年度に再調査(81次調査)を行い、平面掘削によってその輪郭を捉えた。その結果、大型の竪穴住居の中央に直径6mほどの空間に同様の焼土塊遺構が存在することが判明した。中央部は同様に空閑地となっており、ドーナツ状に焼土塊が広がっていた。その直上には壺や甕などの弥生土器があり、生活面として利用されていたことが判明した。同住居では厚い貼床のうえに精良な粘土を貼り、上面に火力を加え「焼床」を付設しており、生活に利用されていたことが窺われた。精良な粘土を貼り、火力を加える構造や製作工程は同じであり、62・67次調査で検出された焼土塊遺構と共通するものである。焼土塊遺構は、居住空間の一部に付設された構造物と考えられるが、国内では類例がほとんどない。しかし、原三国時代の朝鮮半島の遺跡には壁や床を焼く事例があり、そのような建築技術の流れのなかで捉えられる可能性がある。

以上の点から、62・67次調査で発見された焼土塊遺構は特殊な工房などの施設ではなく、阿村町字下大洲例のように竪穴住居が削平を受け床面の一部が残存したものか、あるいは平地式住居の床面が残っていた蓋然性が高いと思われる。滋賀県では古墳時代中期から後期にかけて朝鮮半島に系譜をもつ大壁造りの住居跡が多くみられ、大津市などではオンドル状遺構も存在することが知られるが、日本海をとおして朝鮮半島との交流が歴史的に多く見られる地域である。鉄器が多量に流通する弥生時代後期にも、大陸との交流によってもたらされた建築技術として焼土塊遺構は捉えられるのではないかと。

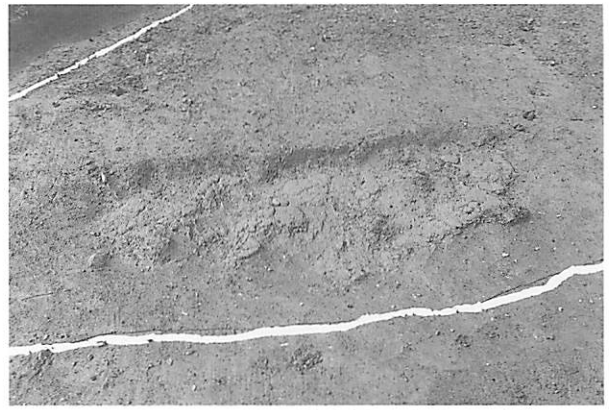


挿図 18 伊勢遺跡全体図

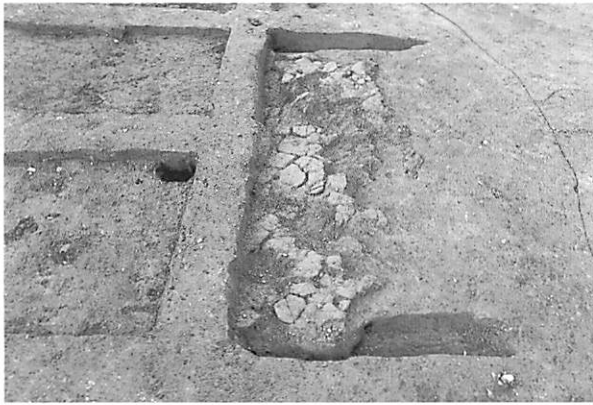
圖 版



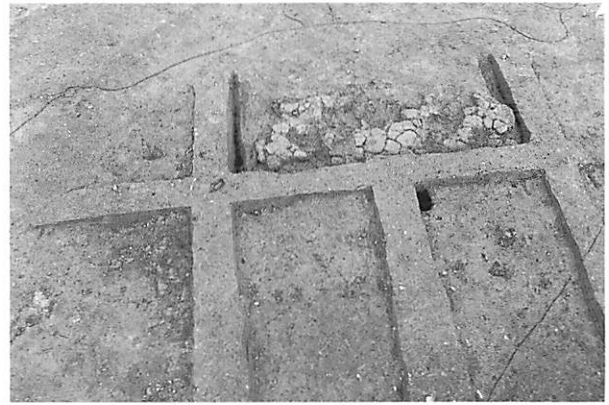
調査地全景（東から）



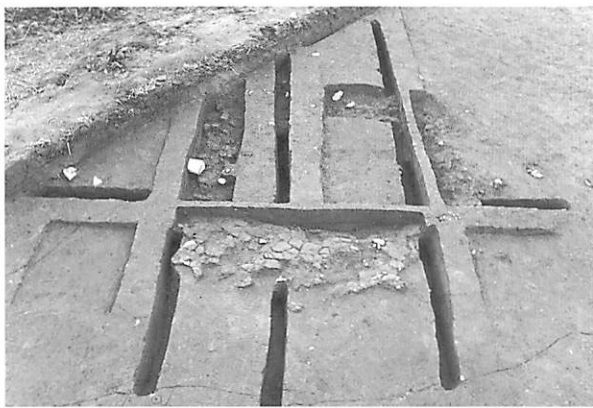
SX - 1 焼土塊遺構出土状況（東から）



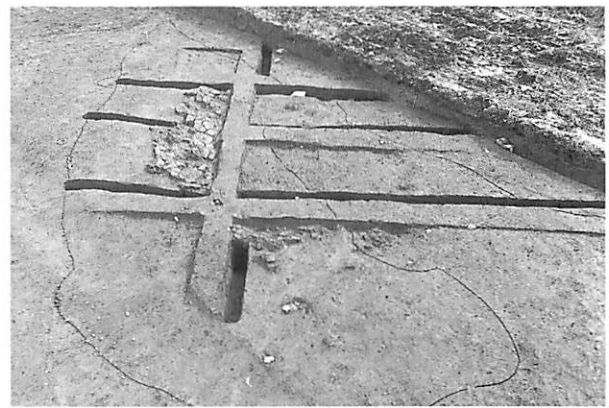
SX - 1 焼土塊遺構出土状況（南から）



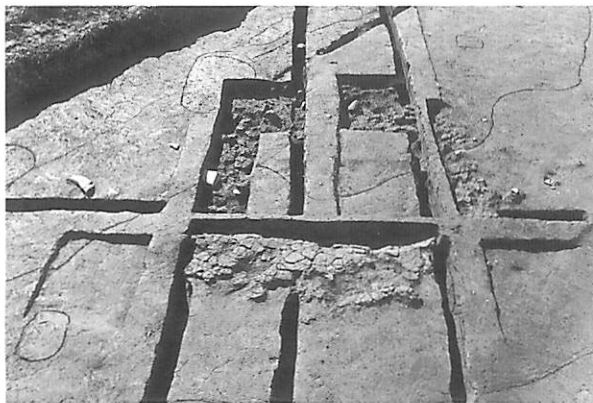
SX - 1 焼土塊遺構出土状況（西から）



焼土塊遺構全景（東から）



SX - 1 全景（北から）



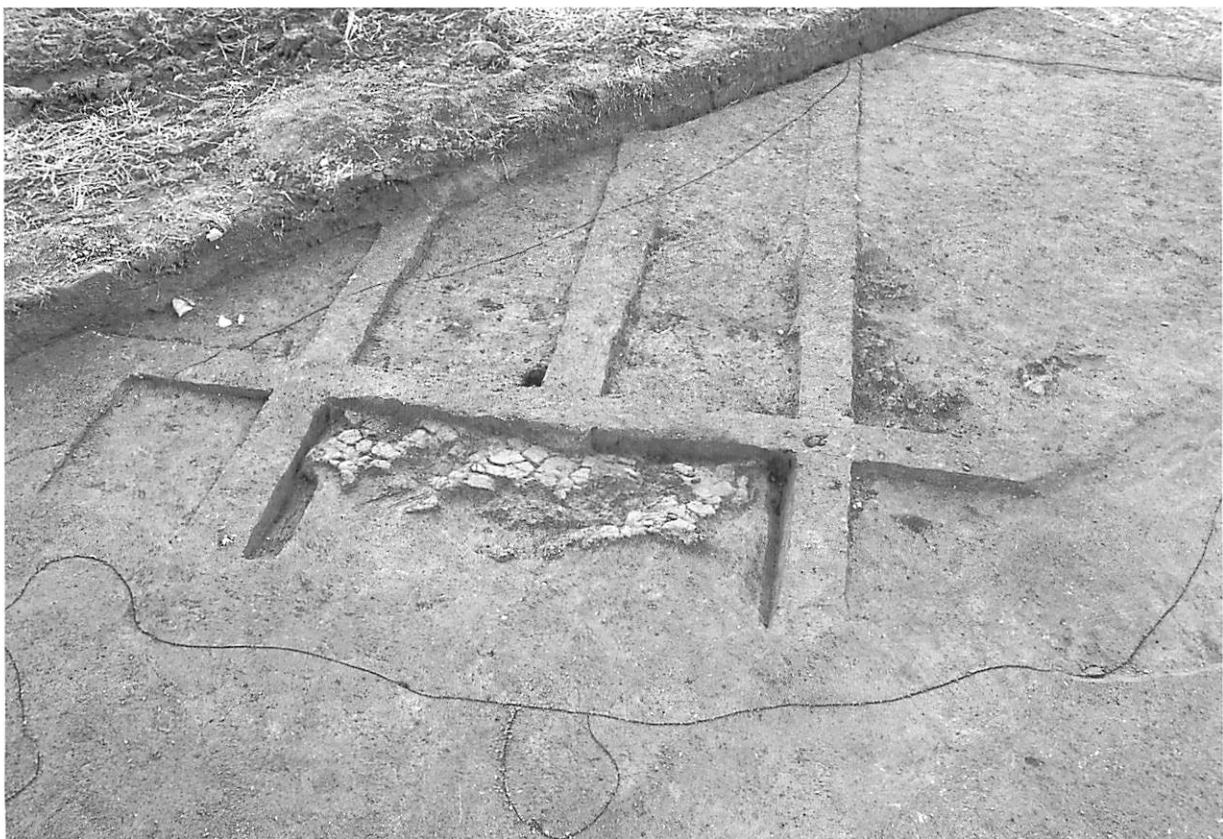
焼土塊遺構掘削状況（東から）



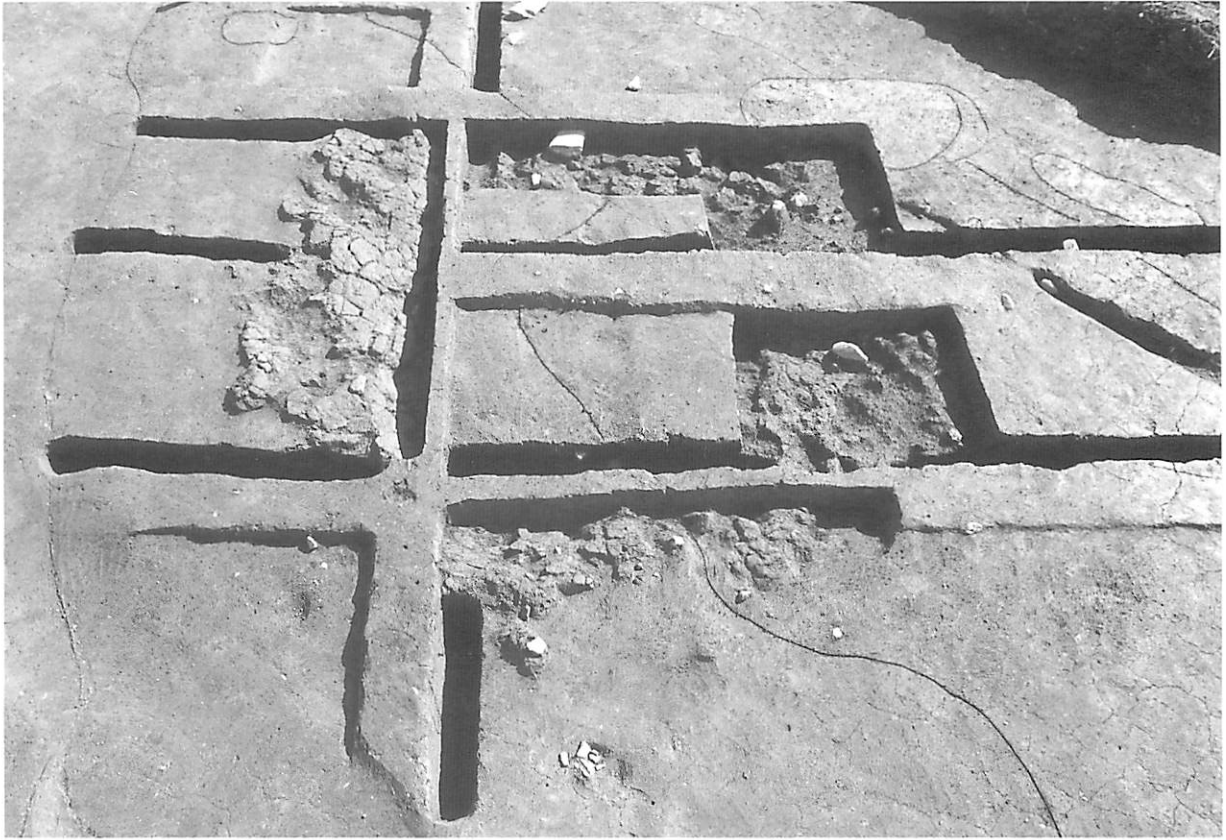
焼土塊遺構掘削状況（南から）



焼土塊遺構検出状況（西から）



焼土塊遺構検出状況（東から）



SX-1 (北から)



SX-1 (東から)



T-1 全景（北西から）



SX-1 全景（北西から）



SX-1 全景 (西から)



焼土塊遺構全景 (北西から)



焼土塊遺構検出状況（南から）



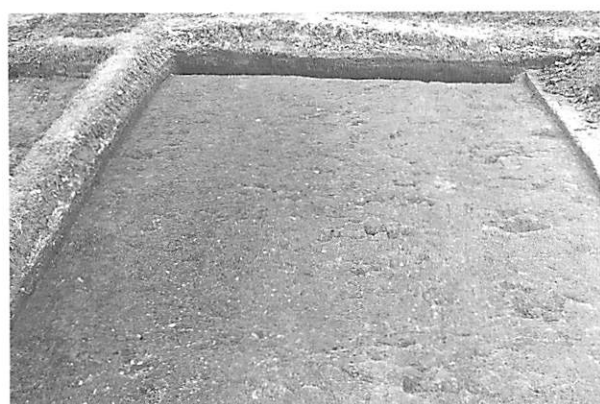
焼土塊遺構検出状況（北から）



T-3 全景 (南東から)



T-3 全景 (北から)



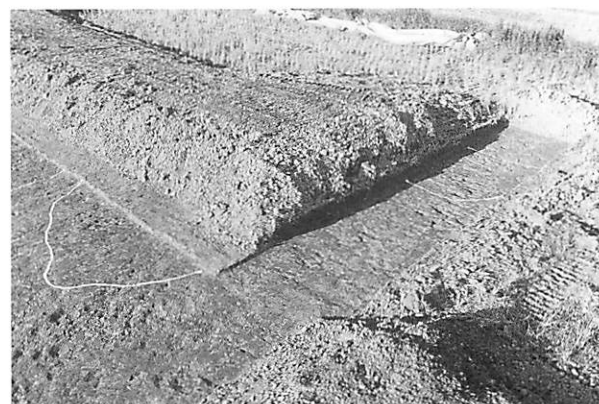
T-2 全景 (北西から)



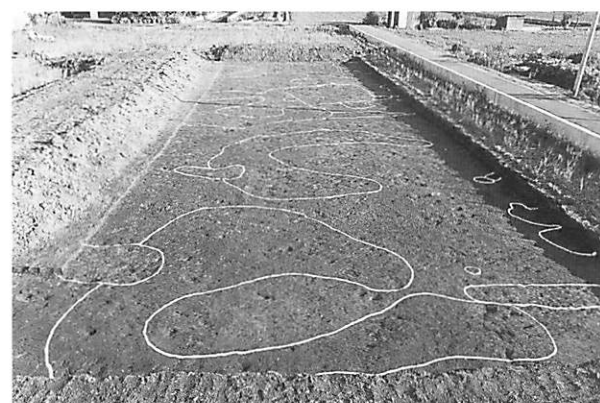
T-2 南東壁断割り (西から)



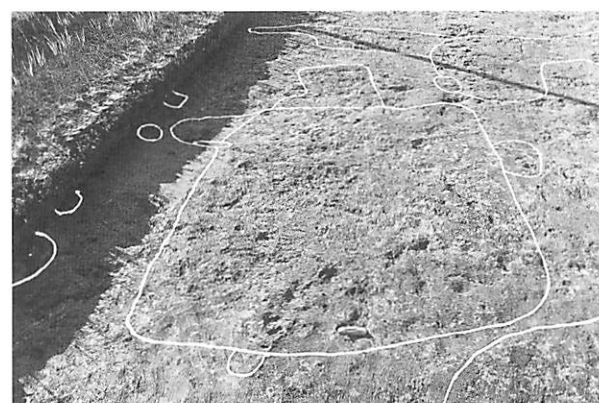
T-5 全景 (南東から)



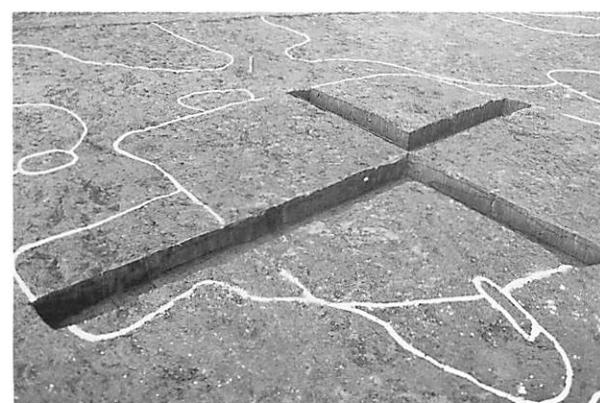
T-5 東拡張 (南から)



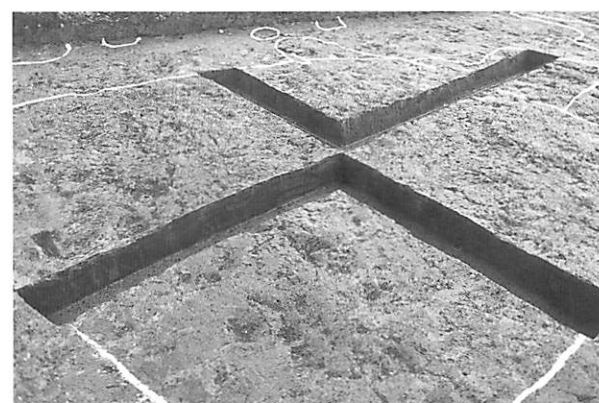
T-5 全景 (北西から)



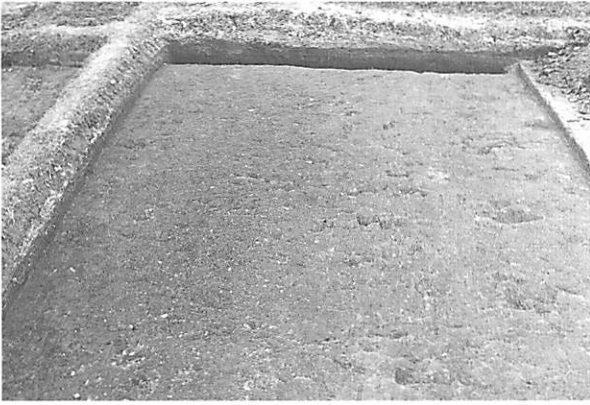
T-5 SH-2 検出状況



T-5 SH-2 断割り (北から)



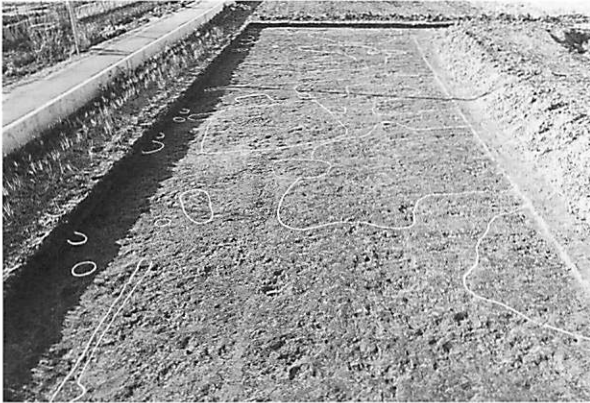
T-5 SH-2 断割り (東から)



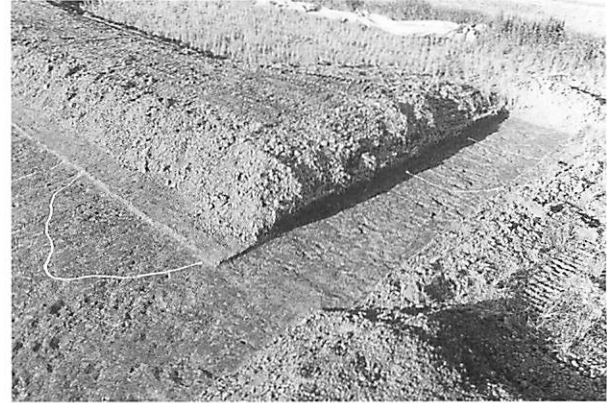
T-2 全景 (北西から)



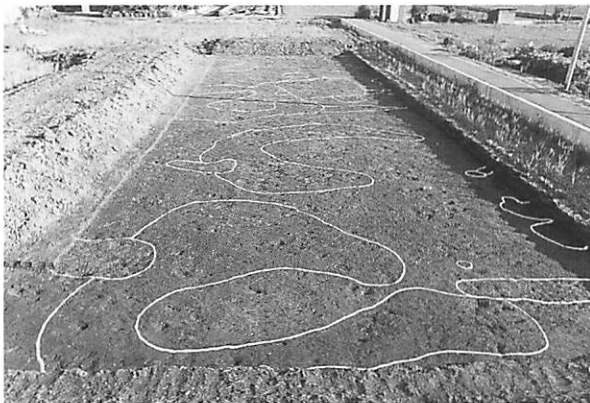
T-2 南東壁断割り (西から)



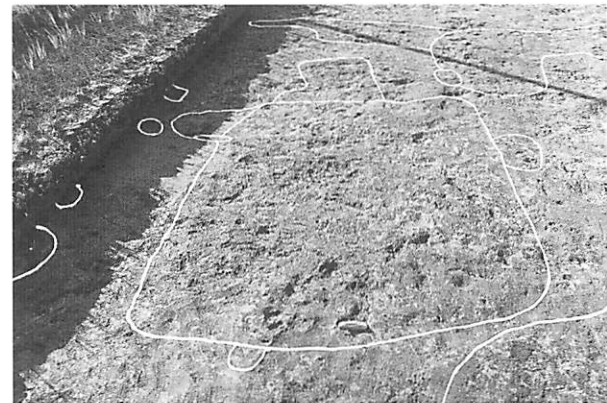
T-5 全景 (南東から)



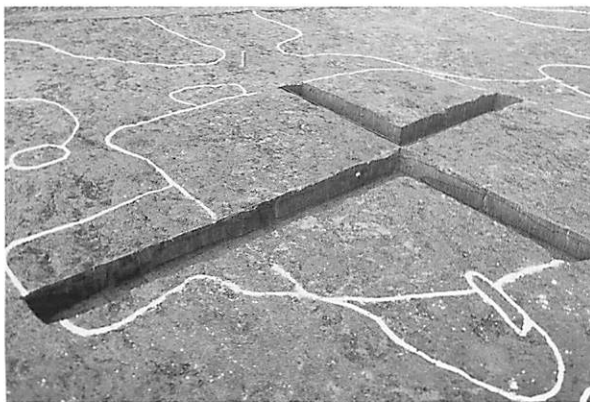
T-5 東拡張 (南から)



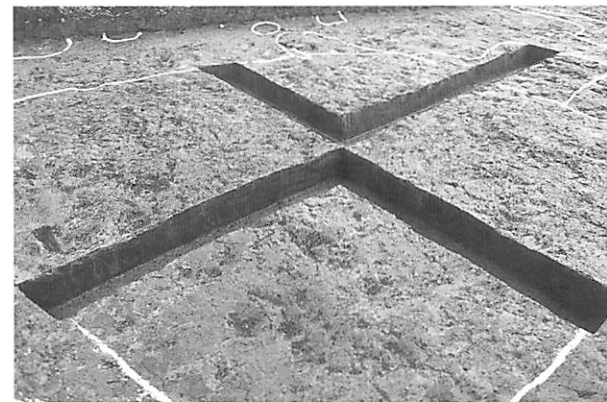
T-5 全景 (北西から)



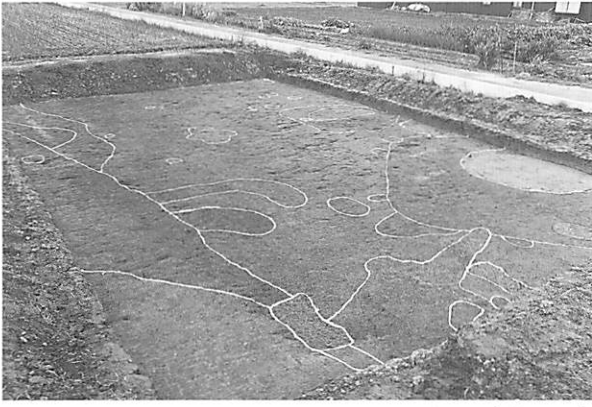
T-5 SH-2 検出状況



T-5 SH-2 断割り (北から)



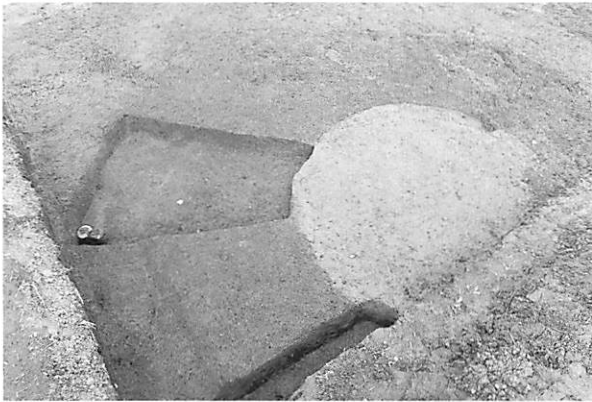
T-5 SH-2 断割り (東から)



T-4 全景 (北から)



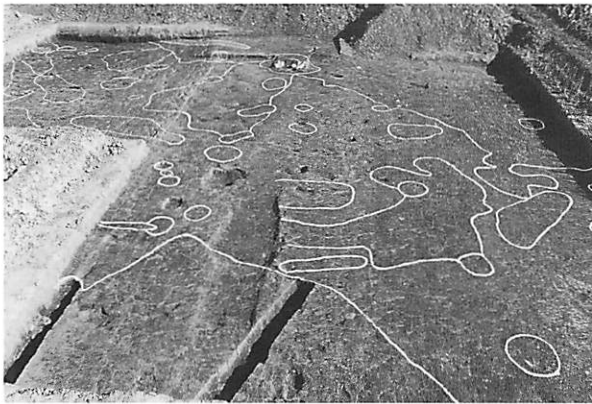
T-4 SH-1 検出状況 (南から)



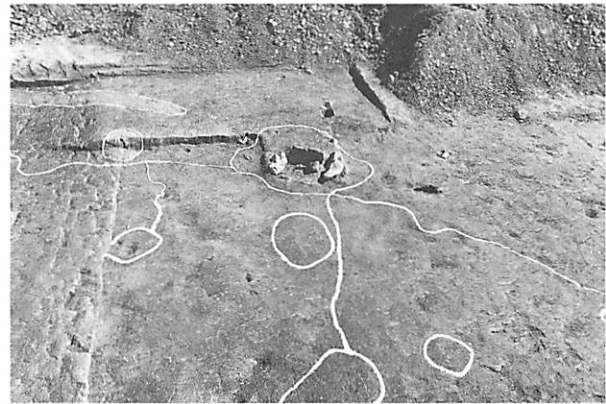
SH-1 掘削状況 (西から)



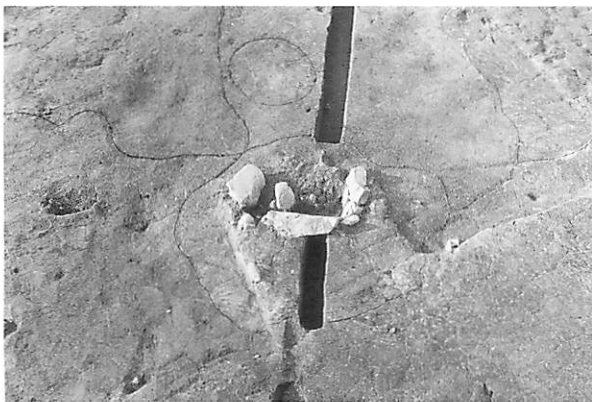
SH-1 遺物出土状況 (南から)



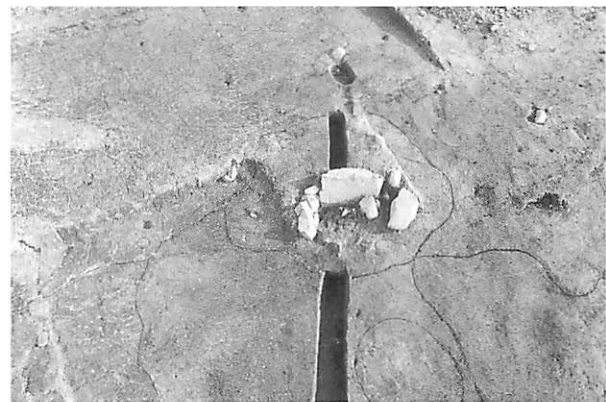
T-3 全景 (北西から)



T-3 石囲炉検出状況 (北西から)



石囲炉全景 (南東から)



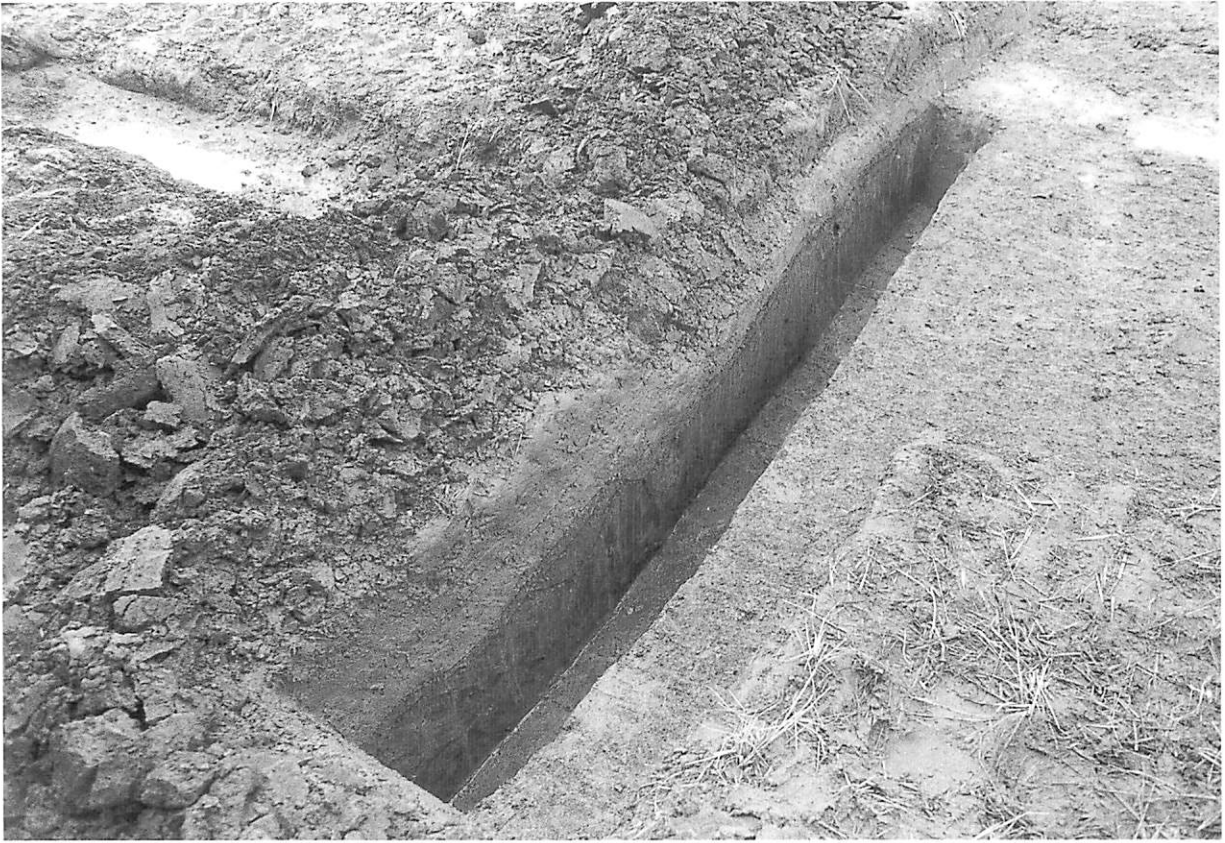
石囲炉全景 (北西から)



調査地全景（北東から）



調査地全景（南西から）



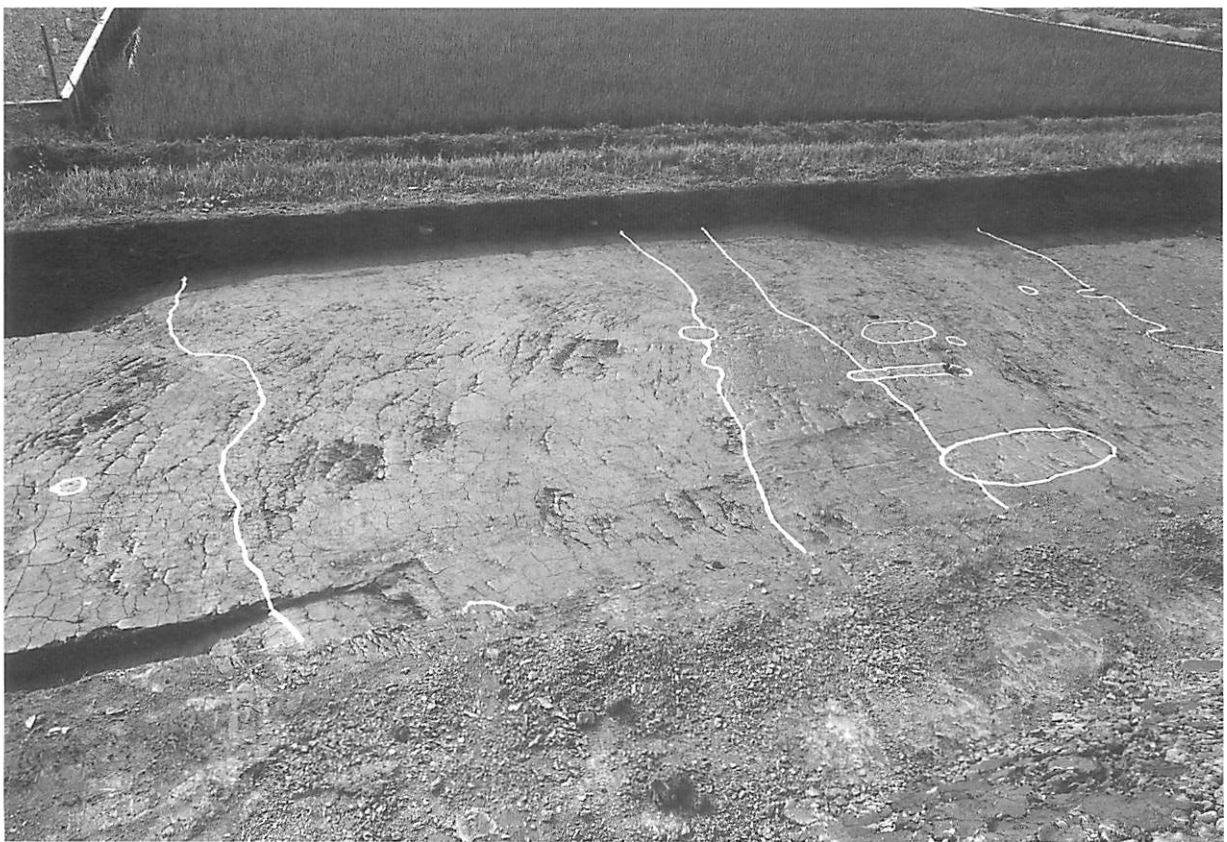
断割り 1 (東から)



断割り 2 (南東から)



調査地全景（南西から）



遺構検出状況（北東から）



旧河道検出状況（西から）



旧河道断面（西から）



調査地全景（北西から）



旧河道断面（北から）



調査地全景（西から）



調査地全景（北から）



62-1



62-2



62-3



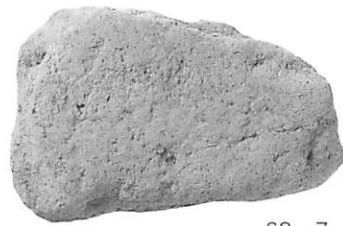
62-9



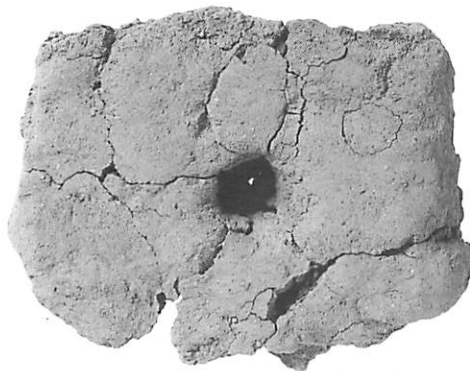
62-8



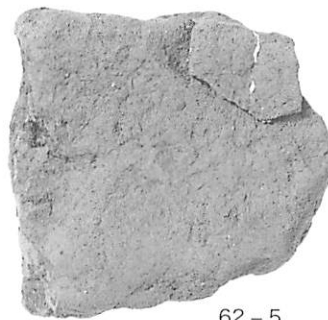
62-6



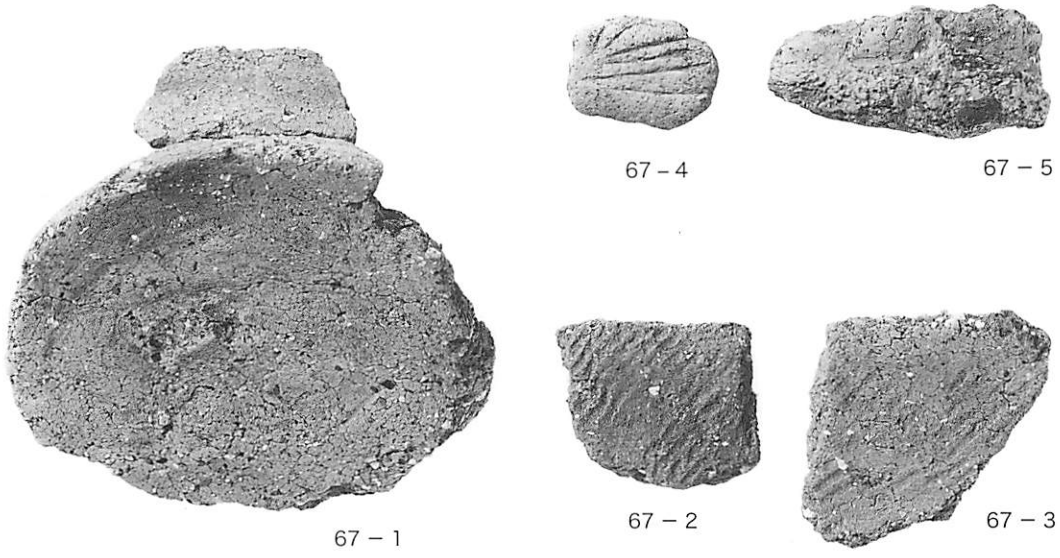
62-7



56-4

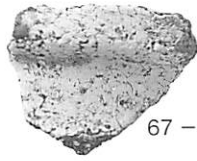


62-5





67-14



67-11



67-13



67-9



67-15



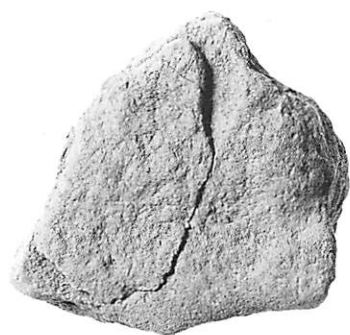
67-10



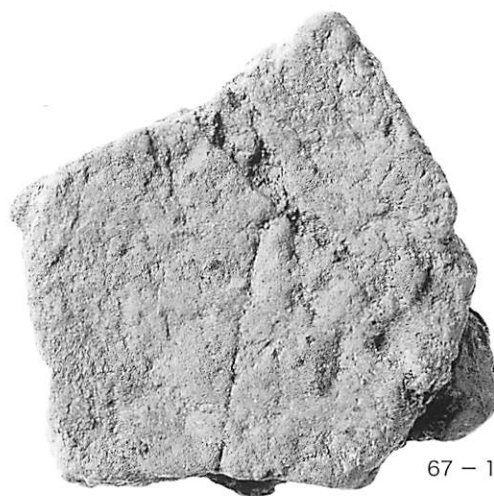
67-12



67-16



67-17



67-18



69-3



69-8



69-4



69-6



69-1



69-2

報 告 書 抄 録

ふりがな	いせいせきかくにんちょうさほうこくしょⅢ							
書 名	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ							
副 書 名	守山市文化財調査報告書							
シリーズ名	守山市文化財調査報告書							
編 集 者 名	守山市教育委員会 伴野幸一							
編 集 機 関	守山市教育委員会							
所 在 地	〒 524-0021 滋賀県守山市吉身二丁目 5 番 22 号 TEL 077 - 582 - 1156							
発行年月日	西暦 2005 年 3 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北緯 。 , ' , "	東経 。 , ' , "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
伊勢遺跡	守山市伊勢町	207	062	35° 2' 16"	135° 59' 40"	平成 12 年 2 月 1 日～ 平成 14 年 2 月 8 日	3000	確認調査
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
伊 勢 遺 跡	集 落	弥 生 時 代		土壙・柱穴・溝		弥 生 土 器 古 式 土 師 器 縄 文 土 器 土 師 器		

伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ

守山市文化財調査報告書

発 行 日 平成 17 年 (2005) 3 月

編集・発行 守山市教育委員会

滋賀県守山市吉身二丁目 5 番 22 号

印 刷 博善社印刷 (株)